

淨土

昭和十三年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十三年一月廿日印刷本
昭和十三年二月一日發行

第四卷 第二號

二月號



改増
訂
版補

信仰本讀

錢三十二 定價 共送料 頁〇八版六四 付名假りふ總 著 康 辨 村 中

邪教の迷夢より醒めよ！ 信仰を
正しい軌道の上に！

邪教が跋扈するのは民衆生活の深刻化を物語るものであるが、同時にそれは正しい信仰の光が遮られてゐることを示してゐる。凡ての迷蒙から己れを解放し、生活を確立するためには己れの信仰を正しい軌道の上にのせなければならない。
今回法然上人鑽仰會は信仰を求めて、しかも良師を得ざる人々のために、この名著の増補改訂版を出版し、正しく、力強い信仰への扉を打開く。『浄土』誌上の著者の名講義の愛讀者は是非一讀せねばならない名篇である。

内 容

- 第一章 悟りと救ひ
- 第二章 宗教と人間の望み
- 第三章 信仰する心持
- 第四章 信仰の本尊
- 第五章 信仰を得る迄

法然上人

大正大野法道著 四六判定 價拾八錢
學教授 法然上人に關する文獻は古來少しとしなかつたが、いづれも難解に過ぎるか、浩瀚に失するかして、萬人に適する文字を得なかつた恨みがある。篤學の著者が研磨してものしたるこの簡潔にして要を得たる一本は讀者をして直接上人に接するの思ひあらしめ、その端々たる餘韻は讀む者を法悦の彼方にひき込ますにはおかない。

◆ 會 仰 鑽 人 上 然 法 所 行 發 ◆

法然上人の 信仰生活

中村辨康 著 四一六頁 定價 送料 共 三十三錢

これぞ光明！ 時代の悩みを一身に背負ひ、精
魂をつからしめて、求めに求めた巨人が求道生
活の跡！

現代日本人が擧つて求めてゐるものは現實の生活に確りと根を張つた正しい信仰である。それがこゝにある。宗教を特權から解放して正しく民衆の上に齎らした巨大無双なる聖、我らが祖師法然上人の辿り給ひし信仰の道程こそ、現代人の求めてやまぬ信仰と最も良く合致するものである。
この書には、上人が萬人と共に悩み求められた求道、信仰の御生活を軸とし、それを廻る時代の種々相を描いて、何人にも納得の行くやう新切丁寧に説かれてある。
読んで得られよ！ 正しい信仰を！

目次

第一 求道生活 第一期求道生活——求道の動機、恩讐の彼方へ、菩提寺での生活、上洛の道すがら。二第二期の求道生活——叡山の出家生活、功德院の學問生活。三第三期の求道生活——讀書三昧の生活、叡空上人との接觸。四第四期の求道生活——碩學歷訪の旅。五第五期の求道生活——再び讀書生活へ。
第二 信仰生活 一入信時代の新生活——強い自己反省、萬人を包む人間反省、開宗の根底。二開宗時代の生活——山を下つて京の町へ。三專修念佛の生活——信仰を萬人の胸へ、集つて来るあらゆる階級、偉大なる人格の力、大原勝林院の信仰問答、全佛教の再認識。四迫害受難の生活——三十年氣が付かなかつた恨み、具體化して來た迫害、弟子の罪を負ふて、逆縁を順縁と見る、死生を超へた信仰の力、配所から再び京へ、死後まで續けられた迫害、宗教の極致。法然上人年表

◇ 發行所 法然上人鑽仰會 ◇



◇ 浄土 第四卷 第二號 二月號 目次 ◇

表紙・扉 鈴木金平

講話 戦ひと念佛 野上運外 (八)

隨筆 山鳩は鳴く 吉田絃二郎 (二)

信仰隨筆 生命祭り 中野尅子 (五)
食堂教育 森脇孝之 (四)
日が暮れる 中村辨康 (三)

信仰相談 (四)

偶話 浄土に生きる (鈴木金平畫) 齋藤要 (一六)

名話人 圓朝と鐵舟 (福田勇畫) 三宅連 (四)

新着 一口噺 誰にも出来る貯金法 (三)

往生の論 非凡なる大凡人 (五)



隨筆 明日知れぬ命……………生田花世(三)

隨筆 放哉の句を語る……………奥平祥一(七)

偉人の言葉に聞く(田中光顯伯 德富蘇峰氏)……………(四)

歌壇……………與謝野晶子(三)

俳壇……………太田耳動子(五)

現代小説 眞實の闇路(大郎畫)……………野原完二郎(三)

童話 日の丸の旗(野水 昌子畫)……………菊池謙雄(三)

漫畫 新春三題……………大羽比羅夫(四)

コント 軍歌……………飯田光明(六)

法語 解說 光の世界 中村辨康……………(六)

鑽仰運動ニュース……………(六)

編輯 後記……………(五)

◇淨土 第四卷 第二號 二月號 目次◇

謎のアシロ

新舊のアシロ全貌

昇曙夢 著

壓倒的 賣行 價 四六判三五〇頁 壹圓五十錢 送料十四錢

世界の怪奇 苦悶ロシアの 徹底的解剖

現今の複雑なるソ 聯の性格は、その建 國ロマノフ王朝 以來の矛盾相剋せる 二元的民族心理を 知らずしては不可解。

見よ！戀の 花・殘虐の 嵐・革命の 血・僞瞞の 舌等その明 暗多彩なる 習癖を。

目次要項 1 文明史上の畸形兒(十八項) 2 ロマノフ王朝没落の悲劇(十七項) 3 ロシア國民性の解剖(十五項) 4 民俗風習の特異性(十三項) 5 革命前奏曲(五項) 6 過渡期のソヴェート社會相(十四項) 7 明暗モスクワ新風景(十項) 8 五年計劃下の社會情勢(七項) 9 宗教彈壓を繞つて(七項) 10 恐怖政治の裏面(八項) 11 反革命陰謀物語(九項) 12 問題のソ聯巨頭論II スターリンとトロツキイ(九項)

後藤朝太郎 著

價 四六判 三〇〇頁 壹圓卅錢 送料十二錢 (群書中 第一の賣行)

支那の男女

支那現代の生活相

この著者にして始めて語り得る現代支那の真相。茫漠・徹底・獵奇と、支那の體臭、芬々として讀者を魅了する。

目次 1 内房の話(十項) 2 山水歡樂情景(九項) 3 支那宿物語(四項) 4 尼寺風景(五項) 5 支那風呂(六項) 6 恍惚の阿片(十二項) 7 パイプの煙(三項) 8 扇と蟲(五項) 9 珍品古鏡(三項) 10 商人氣質(四項) 11 獵奇行脚(九項) 12 新しい女(五項) 13 男女の文字(八項)

室伏高信 著

價 四六判 二九〇頁 一圓卅錢 送料十二錢

謎の支那の全貌

支那 史の表裏を説く！

エロとテロの交錯せる支那興亡五千年史、支那にとつては篡奪・掠奪・殘虐性は日常の茶飯事にて、その享樂性とを併せて知らざれば、支那を眞に解す事は出來ぬ。本書は支那のサイクロペディアである

東京市芝公園七ノ十 大東出版 東京市芝公園七ノ十 大東出版

淨土

二月號

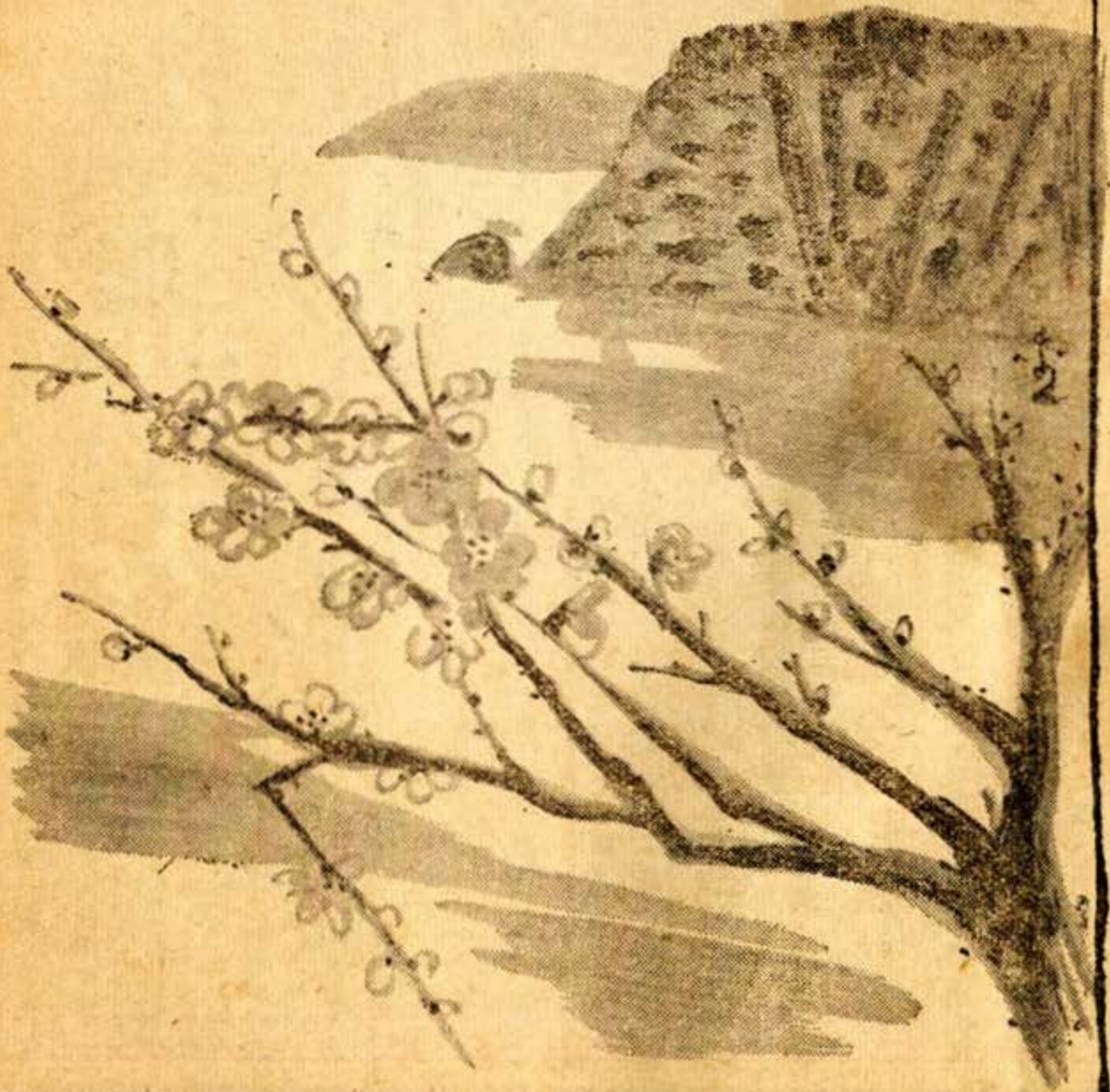
名利は生死のきづな

三途の鐵網にかゝる

稱名は往生のつばさ

九品の蓮臺にのぼる

法語抄一三六



山鳩は鳴く

吉田 絃二郎

今日も武蔵野は黄塵につゝまれて、寒い北風が吹きすさんでゐる。わたくしは佛間に坐つたまゝ軒近く鳴く山鳩の聲を聴いてゐる。庭の檜の實を啄んでは、でゞッほう、でゞッほうと啼く山鳩の聲を聴いてゐると、誰かに話しかけて見たい氣もする。去年七月から二百餘日、晝となく、夜となく生死の一事に思惟をこめて來た自分をかへり見て、言ひやうもなく寂しい思ひにとざさるゝこともある。これから幾年わたくしは櫛の下しほの離房りぼうに孤坐こざして、冬が來るごとに、櫛の實を啄みに來る山鳩の聲を聴かなければならぬことであらう。縁を下りて、靜かに庭の櫛の下に立つて見ると山鳩もたゞ一羽で來てゐることが多い。山鳩も孤獨こどくなのかも知れない。

誰かの本に上野毛あたりの多摩川で一番ひの鴨を撃つた人の經驗けいけんが書いてあつた。初めの日一羽だけ撃つたが、なか／＼鴨を採すに骨が折れ、辛つと敷しきの中で死骸を見つけた時は不思議にも首は千切れてゐて發見されなかつた。その男はさらに數日後同じ多摩川で撃ち残した一羽の鴨を撃つた。しかも鴨の翅の下に隠された干からびた首を發見した。それ以來かれは銃を捨てゝしまつたといふことであつた。

このころでは見かぬが、數年前までは夕方など多摩川の土堤を歩いてゐると、時折鴨を見たものである。わたくしは日暮れごろの鴨を見ることにこの話を思ひ出した。

悲しみをじつと見守るといふのは人間ばかりのことではな

いらしい。畜生にも同じやうに耐へがたい悲しみといふものがあるのであらう。

今、わたくしの庭に来て鳴いてゐる山鳩も、その相手を誰かに撃たれたのであるかも知れない。

x

或る友人が訪ねて来て、「君の現在の生き方としては、その悲しみに徹することが第一である。下婢などを置かず、たゞ一人で生きることだ。」と語つた。

それはわたくしも昨年来考へてゐることである。しかし來客の面倒から、臺所のこと一切を自分でやるといふことは現在のわたくしにはできない。それを實行するためには先づ家を捨て、山の庵にでもこもらない以上は不可能である。昔の人が山に入つたのもそのためであつたらう。芳野の奥の西行庵の事などを思ひつゝ、半日庵の芝生の上に佇むこともある。といくくの清水は西行庵から一丁ばかりも手前の小徑の下に湧いてゐた。庵の軒に迫るほどにめづらしくも大きな馬酔木が眞白な花をかほらしてゐた。

わたくしは尙一度芳野の奥を訪ねるつもりでゐたが、恐ら

くふたゝび西行庵を訪ふことはしないであらう。それは餘りに悲しい思ひ出の旅となつてしまつたからである。

西行がもし宗門の人であつたら、最後まで山寺にこもつて悲しみに徹したであらうが、かれはやはり歌人であつたために、幾度か山の庵を捨てゝは飄々として旅に出で、旅をつづけた。かれにとりては旅も山寺の生活も一つであつた。かれは四國の旅にも、中國あたりの旅にも、芳野の旅にもそこに庵を結んで一年なり、二年なりの庵の生活を営み、やがてまた風のごとく旅をつづけてゐる。念佛を唱へて人の門から門に立つかはりに、かれは旅から旅に寂心を追ひもとめて歩いた。歌は寂人西行の念佛であつた。

「いく程もながらふまじき世の中に物もおもはでふるよしもがな」

もの思ふことの苦しさを知るわたくしにとりて西行のこの歌は切々と迫るものを感じさせる。かれが絶えずものおもひつゝ七十二年の生涯を耐へ忍んだことを思ふ時、わたくしは幾分の勇氣をあたへられる。もの思ふ者にとりて生きることが苦しい。しかもその苦しさを生き忍ぶことによりてさらに深き人生を見、さらに遠き死の世界を見ることができるとあ

らう。

「都にて月をあはれとおもひしは數にもあらぬさびなりけり」

さらに深い悲しみを知つた者は、かつての悲しみはものゝ數にもならぬ悲しみであつたことに氣づくであらう。

都にゐて月を見てさびしいと思つたことはいはゞ贅澤なことであつた。月のさびしさは天涯孤獨の異郷に在りてはじめて味はゝれる。人生の悲歎もさうである。父を失つた悲しみ母を失つた悲しみ、妻を失ひ、すべての子を失つた悲しみを經驗して後にはじめて人生の悲しみを知ることができであらう。夜毎床上に反轉し 悶え、歎き、歎歎する程の悲しみを經驗するまでは、人は數ならぬ悲しみを悲しみと思つてゐる。そして人生にはさらに深い悲しみのあることを知らない。道理からいへばそのどん底の悲しみから解脱して眞理に觸れよといふことになる。言ふことは易い。しかし寒巖枯木にあらぬ人間にはまことに至難のことである。たいていの場合人はその悲しみの感情を麻痺させようとする。それも人情である。しかし麻痺しようとしても麻痺されぬほど根強く魂の底に喰ひ込んでゐる悲しみは大死一番底の悟入の他には救

はれないであらう。久遠のいのちに觸れるか、觸れ得ないかのたゞ二つの道がある。生きるか、死ぬるかである。西行法師が一生旅をつゞけたのも、この苦しさ、寂しさの中に久遠のものを追ひもとめたからであつたらう。西行の歩いた道の尊いのは、そこにあると思ふ。西行の歌のすぐれてゐるといふことよりは、一生旅をつゞけて久遠の實在そのものにあこがれてゐた西行の心構へこそさらに尊く思はれる。

旅をつゞけるといふことは西行にとりてさらに深い悲しみを知ることであつた。

「なみだのみかきくらさるゝ旅なれやさやかに見よと月はすめども」

駿河の久能山で月をながめたをりの歌である。旅の行く先に西行は一層深き悲しみと寂心とを觀じつゝさらに旅をつづけてゐる。それは一層深い無常を觀じ、さらに遠い世界の悲しみを知るために念佛する人の心であらう。聖者は喜びの裡に佛を見出すこともできるであらう。しかしわたくしどもは身を刻む悲歎の底にのみ悠久なるものに觸れる。



想：隨：仰：信

生 命 祭 り

中 野 尅 子

朝になつて眼を覺ましてみると、昨夜寝

てゐる間は、自分が寝てゐるとも知らず

に、グッスリ寝てゐたのだが、眼が覺めて

みると、あの寝てゐる間も、生きてゐたの

だと、今更のやうに感じます。寝てゐる

間は、自分が生きてゐるとも、死んでゐる

とも思はずに、總てを忘れて寝込んでゐた

のに、目の覺めた處を見ると、矢張り、寝

てゐる間も生命が續いて、私を活かしてゐ

て呉れたのだなとつくづく感じました。

こゝに、生命の神秘があつたのです。

私達が生きてゐるのは、私達が生きるつ

もりで生ききてゐるのでなく、私達が思ふ

以上の、至高の一點から活かされてゐるの

です。

私達を「生かさうとする」大生命が、實に

私達を活かしてゐて下さつたのです。

だから私達が、知らずに寝てゐる間も活

かされてゐたのです。活かしてゐて下さつ

たのです。有難い——

私達の生命は、そんな深い中心から現は

れて來てゐたのか。そんな、おそろしい力

で我々を活かしてゐて下さつたのか。「お

恵」といふのは、コレがお恵みであつた。

「活かされてゐる——」といふことが、人

生に於ける最大の恵みだと私は思ひます。

□

私達が「オギャー」と云つて生れて來

るのも、コノ大生命から生れて來るのでし

た。いや、コノ大生命が「私」といふも

のになつて誕生して下さるのです。だから

芽出度い。

「めでたい——」と云ふのは「私」が芽

出度いのでなく、私といふものを生んで

下さつた無量壽、無量光といふものが芽出

度いのです。だから誕生を祝ふのです。ア

レは「生命祭」です。

だから「人間」を祝ふのでなく、「如來」

を祝ふのです。「生命」を祝ふのです。どん

なドラ息子が生れて來たのでも祝ひます。

どんな片輪の兒が生れて來たのでも祝はん

ならぬと思ひます。それは産んで下さつた

「み力」を思ひ、深き「み恵」を思ふ時、どんな十二人目の子でも十分祝つていゝ、祝はなきやならぬと思ひます。だから子供でも、自分の子供でもナク、人間の子供でもなく、「如來の子」です。いや「如來さま」それ自身であつたのです。だから、その初聲は如來の叫びであり、「大生命の叫び」であります。それだから芽出度い。

□

死んで逝くのも——

死んで行くのでない。

此の世の中へ出て来るのも、大きな生命の力で出て来たのだし、此の世から入つて往くのも大きな生命の力で入つて往くのです。恰度、太陽が昇つて来るのも大きな生命の力、没して行くのも大きな生命の力であるやうにたゞ永遠に續く「生命の流」であつて、その流れつゝある生命の一點を護生と云ひ、一點を死と云ふだけです。

生きる力も如來の力

死ぬ力も 如來の力

生きる姿も如來の行き給ふお姿であり、死ぬ姿も、如來の生き給ふ尊き活動のお姿であります。産れて来たのも芽出度いなら死んで逝くのも芽出度い。誰が勝手に、自分の力だけで死んで逝ける人が一人でもあるでせう。死ぬ時が来ねば、何遍死にかけても決して死ぬぬのです。その代り、死なねばならぬ時が来たら、どんなに泣いても怒つても死なんならぬのです。それを思へば死ぬることは有難い。死なして下さることは絶大です。

それを、ナゼ、誕生の時ばかり祝つて、臨終の時を祝はぬのでせう。生れて来る時、如來さまの御厄介で生れて来たのなら、死んで行く時も、如來さまの御厄介で死んで行くのです。だから有難く感謝して、萬歳を稱へて祝つて行つていゝ譯です。それなのに、皆、泣いたり喚いたり悲んだり憫んだりしてゐるのは、皆信仰がナイからです。いくら解つてゐるやうな悦んでゐるやうな顔をしてゐても矢張り、わかつて

居らなかつたのです。

それを思ふと、あの戦地の兵隊さんは偉いと思ひます。どんな兵隊さんでも彈丸に中つて斃れる時は、皆、

萬歳！ 天皇陛下萬歳！

が稱へて死ぬるのです。吾れ生けるに非ず如來によつて生かされてゐたのであり、吾れ戦へるに非ず、陛下の御稜威によつて戦はしめられてゐたのである——と思へばこそ、

陛下よ、おさらばで御座います。只今まで幸ひに、陛下の御稜威の下、陛下の御命令に依つて、些の遺漏なく、私の本分を盡さして頂けたことを厚く感謝いたします。

と、萬歳の一語に籠めて、聲高々と稱へ奉つて、ニッコリと斃れて往けるといふことは、何といふ勇ましい事です。我々も、私達の臨終には、

オ、皆、集つてくれ！ そして私の最後の瞬間、最後の船出を祝つてくれ！

如來さまの御慈悲によつて、如來さまの生命の大海へ、悠々漕ぎ出して行くのだ。一足先へ、永遠の生命海へ、俺は旅立つのだぞ。サア、一緒に萬歳を稱へて呉れ——

と、大きな聲で「萬歳！」が唱へて死んで往けるのではなくては本當でない。此の萬歳！が南無阿彌陀佛です。誕生祝と共に「往生祝」を親戚へ配れるのではなくては本當でない。

「往生」といふのは、死んで行く時ばかりが往生でない。誕生して來た時も「往生」なら、死んで行く時も「往生」で逝けるのが當り前です。人間は始めから終りまで「往生」で往來し、往生ならざる時は一つもナイのです。だから、

儲かる時も結構なら！損した時も結構！
病氣の時も結構なら
結婚や卒業の時も結構！
火事で丸焼や、地震で丸潰れの時も結構なら

出世や成功の時も結構です。

人世、あらゆる過程、一つとして「往生」ならざる時なく、皆、結構にならして頂く結構な道中です。だから失敗しても萬々歳、最後臨終の死際も結構萬々歳です。

□

佛教の専門語で「法」といふのは、此の「生命」の世界です。人間初め總てのモノは、皆、コノ「法」より生じ、「法」によつて生かされてゐる「法」です。だから「如來の法」と謂はれてゐる。

「如來の法」だといふのです。「如來の子」だといふのです。最早我れ活けるに非ず、如來吾れに在りて活けるなり。我れの活けるは如來が我れに在りて生き給ふのです。

最早、我れの吾れでなく、「如來の我れ」であり、我れが如來であつたのです。人生でなく神生、如來生であつた。少くとも、如來の生活としての第一歩が踏み出せるのではなくては「人間の更生」でなく、「自己の更生」でナイです。

それを「僧」といふのです。僧とは、人間が「信仰」になつたことを僧といふのです。「信仰の人間」になつたのを「僧」といふのです。

その「完全人」を「佛」といふのです。その人間が理想的になつたのを「佛」といふのです。だから「佛」は完全に「法」であり「如法」であります。

そして人間も必ず、如法にならされ、佛にならされて行く。それは「如」そのもののハタラキ「法」そのもののハタラキとして、常に「如來し」「法性して」總てのものを「如來」にせようと活動してゐて下さるからです。これが「萬法成佛の原理」「一切衆生救済の原理」「森羅萬象向上進化原理」であると思ひます。

私達は、知ると知らざるとに拘はらず、頻々に、此の「如來の太用」によつて進化した向上しつゝあるのです。これが生命發展の原理です。これが人間を良くし世界を眞實平和に導きつゝある。



戦ひと念佛

登譽上人の問答より

浄土宗執綱

野上運外

前號に「徳川家康の軍旗」について大野法道師が執筆せられたが、登譽上人と家康との問答が時局柄極めて興味あるもので、更に詳しく紹介するためにこの稿を頂いた。(記者)

徳川家康公は浄土宗を信じ、念佛の日課一萬遍を一生怠らず、陣中でも家庭でも一日も休んだことがなかつたさうである。或る時、二代將軍秀忠公の、奥方へ遣はされた書中に

近年日課を六萬遍づゝ唱へし事老人のいらぬ過後にて候、へん數へらし候様に皆と申候よし、成程遍數へらし候はゞ樂に成候得共、幼少より戰國に生れ多くの人を殺し候へばせめて罪亡しともなり申候はん

云々。

とあるのを見ても、眞に大乘菩薩の慈行、東照大權現の現はれであつて、徳川三百年の大平もこの邊に深い原因があると思はれる。

また家康公の遺言百ヶ條の第二十八條に我一代の戰場を憶ふに終に九十合なるべし、萬死を出で、一生を得たるもの十八度、都て厭離欣淨の法文を帶て免るゝを得たり、故に關東十八檀林を開いて之を謝す、子孫永々浄土の宗門たるべきこと以上の如く家康公は篤く浄土宗を信仰し、武人として念佛信仰の龜鑑となるべき一生を送つたのであつたが、それには登譽上人の誠に俟つことが多かつたのである。

*

今から七百七十八年前、永祿三年五月靜岡の城主今川義元は駿遠三國の兵四萬餘騎を率ゐて京師に上らうと、三尾の國境知立に駒を進めたのが同十七日であつた。次で十九日、桶狭間で織田信長の奇襲に遇つて、遂ひに四十二歳を一期として討死した。

當時德川家康公は年僅かに十九歳で、今川義元の一將として大高城を守つてをつた。義元討死と聞くや、その日の夜半に大高城を撤退し、大樹寺に入つたが、この時隨ふものは僅かに十八人であつた。此處で登譽上人に遭つたのである。

登譽上人は禪を天室、信蓮社と號す。相州小田原の人、家族不詳、幼年にして出家したが、性豪壯であつて、氣を負ひ輔宗度生を以て己が任としてゐた。經論に通じ、講説を善くして、容貌魁偉、多力であつたさうである。始め洛陽一心院に住してゐたが、又京都桂村に往生院を開創し、後に參州大樹寺に主とな

つてゐた。家康に遭つたのはその時のことである。

家康は登譽上人に

「これで最早我事も畢つて仕舞つた、潔く祖先の墓前で翻腹しようと思ふ」と云つた。

登譽上人は「何を云ふか、男子たるものは死中に生計を求むべきである。豈座して死すべきではない。吾が檀越に難のあるのは法門の危機でもある。吾は沙門ではあるが、兵事のこと少しは解るから、命を捨てゝも汝を護つてやらう。」と激ました。

そこで近村に使を遣はして、僧俗五百人を招集して方略を設けて寺門を防守した。

急いで布を裁つて旗を作り

厭離穢土、欣求淨土

と大書してそれを自ら持して、軍營を設け規度を定めて、采配を振つて號令を下す様は宛然將軍の如くであつた。家康公もこれによつて大いに士氣を振ひ起されたのであつた。

この時、登譽上人と家康公の間答として傳へられるところのものは、武人と佛教との因縁を説いて誠に興味深いものがある。

登譽上人 公は幼い時から屢々戰場に赴いておられるが、その心勇力を第一として、殺戮を事とせられるのか、家康公、それは武人の常であつて、今更間ふ程のことではあるまい。

曰 それでは何のために殺戮するのか。

答 それは大いに武威を振ひ、城を抜き國を奪はんと欲するからである。しかも敢然大志を有するものは只これのみではない。遂ひに萬邦の主となつて、富天下を有たんと欲するのである。

登譽また曰ふ 富と天下を得るとお前は云

ふが、それは何のためか？

答 家門を興隆し、父母を光顯し、名を後世に留め子孫に傳へるのである。立派なことではないか。

登譽 昔から徳を以て人に勝るゝ者は榮

え、力を以て人に勝るゝものは亡びる。命を天に受けず、唯殺戮のみで威を張り、貪利を以て人の土地を奪ふ者、是れは劫賊のすることである。たとへ、一旦敵を平けて、運を啓き、遂ひに天下を平けても、道ならぬことをして之を得たのでは、飄風の朝を終らず、驟雨の日を終らざるが如く、到底之を長く保ち得るものではない。之を子孫に傳ふるなぞと云ふことはなほさら出来難い。たとへ富貴は天の如く、暫くは享樂することが出来ても、忽ちにして一夢の如く、報は盡き運命はきはまつて、惡逆に漂流し苦を受くること無量である。戒むべきことだ。

公 城を屠り、地を略するは戰國の常であつて、武人としては當然なすべきことではないか。私は未だその善惡邪正を思計してゐる暇がない。寧ろ果報を恐れてゐる。後世のことは師のお救ひに任せるから、どうぞ濟つて下さい。

上人はこの言葉を聞くと、きつと色を正して公は本當に武業を以て劫賊の業と想つてゐるか。そんなことではいかぬ。作業には善とか惡とかあるものではない、唯吾が心の持ちやう如何によるのみである。であるから朝夕念佛を誦してゐても、たゞそれだけで善と云ふ譯には行かぬ。また干戈を執つたからと云つて、必ずしもそれが惡いと云へぬ。我より之を觀れば則ち武業は菩薩の業、大權の善巧である。その譯は、天下は一人の天下ではなく、天下の天下である。然るに主となるものを立てゝ、之れが司牧たらしめる所以のものは、天下を握り上げて自分だけの奢りに給し、萬民を驅てその使役に例する爲めではない。宜しく能く天下の大君たらんとするものは、この民の父母となり、天下の傷ける者、病めるものが生を樂しむことが出来、貧しきものがその養を得、萬民各々その所を得させるやうにしなければならぬ。であるから、人の君たらんものは大度寛恕、深く仁慈を尙ひ、無

コント 軍 歌

飯田光明

二三日前のことである。私の子供が何と言ひ聞かせても風呂へは入らうとしないので、

「何故は入らないの？」

と訊ねると、毛糸のズボンを捲くり上げて、

「こんなになつたよ」さう言つて泣いてしまつた。見ると膝頭が紫色に腫れ上つて、血さへにちみ出るのだつた。

「何故もつと早くお父ちゃんに言はなかつたの？」

「だつて茂ちゃんがお前は日本だ」と言つたから」

「戦ごつこをして轉んだのだね？」

「うん」

傷の手當を終つてから、

「さあもういゝ。日本の兵隊さんは強いから彈丸が當つても平氣で風呂へは入るのだよ、ねえ、お母ちゃん」と私は妻を見た。

事の者を刑せず、兵端を起さず、また、凶惡不軌、教化及ばざる所の者があつたら、これは嚴重に處罰しなければならぬ。是れ殺を以て殺を留むるの道である。所謂菩薩の慈行、大體の善行である。公は代々佛法を信じ、最も淨土の法門に歸す。我今ま淨土の教に由て戦ひの本旨とすべきところを説いて、同時に平和の本來目的を示した。公が禍亂を攘除し、寇難を防禦するの時に當つては常に往生の心を起し、度生の志を懷き、是のやうな念を起しなさい。願くば、兇徒速かに、殲滅し、武を練り、文を修め、念佛の法四海に行はれ、仁義の化萬方に被り、天下圖なく、堯舜の盛世に稱ひ、人民豐樂にして、彌陀の淨利を成せんことを。この願念こそ則ち大菩提心である。菩提心を發せば諸佛護念し、天神加助し、向ふ所敵なく、速かに大平を致すこと手を覆すより易い。

淨土の法門は信を以て要となしてゐる。公戰場に赴かば、矢石雨下すとも、決して上

述の念願を忘れず、専ら彌陀の本願を信じ、て、心の中に、死しては淨土に生き、生きては勝利を得よう、死は素より期する所、生も亦是れ幸ひなりと思へば、生死進退に憂なく、一に佛力に任すのみ。心慈愍に住して口に佛號を唱へ餘念を雜へず、單刀直入すれば、則ち高城深塹、長槍大劍と雖何ぞ公を拒むに足らうや。

是の如く信心を具足すれば、それが厭離穢土、欣求淨土の心に叶つてゐる。であるから、これを以て公の旗印としたのである。

この文句は軍器に付けるのは矛盾してゐるやうであるが、深く考へれば甚だ當つてゐる譯である。云々。

これを聞いて、家康公は始めて目の覺めた如く、これ迄の迷雲忽ち四散して、大いに悟るところあり、謹んで上人より十念を拜受されたのであつた、と。

(をほり)

すると急に元氣づいて、
『もうなほつた』四股さへもふんで、『ほら、ほら』と笑つて見せるのだつた。
私は目頭が熱くなつたやうに思つた。
風呂の中で戦つたこの話をした。
『坊は日本の兵隊？』
『うん、シナになんかならないよ。シナになつたら逃げてばかりゐて射てないのだよ。ジャンケンに負けてもニッポンの兵隊になるの』
『支那は何故逃げてばかりゐるの？』
『不義だから』
『え？』
『シナは不義だから』
『日本は？』
『天！』
不義が何のことだか、天がどのやうな意味を内包してゐるのか、五歳の子供が知つてゐよう筈はない。けれど私は喜びに輝く眸をもつて、健康に張り切る子供の肩を見つめながら、しばらくは爲すこともなく湯槽の中にしたつて考へた。
軍歌がかすめてすぎた。



冬 日
隨 想

日^ひが暮^くれる

中 村 辨 康

風もない長閑な冬の日の朝である。

机の前の紙障子に日の影がさして、それが刻々にバラバラと動く。庭には雀が澤山来て居てチュンチュン鳴き交し乍ら枝から枝へと飛び移つて居る。其影が動くのだつた。

何の變哲もない日曜の日なのである。

うるさい程さへづつて居る雀の鳴き聲が、時々一瞬間バツタリ止んで静寂に歸る。何の爲か知らない。

時には一二分間靜かで居る時もある。

何の理由からか分らない。

或は雀はとても敏感だから、何かの恐怖がさうさせるのかも知れないと思ふ。彼等にも恐怖があるのである。

「生命」に對する恐怖があるのである。

かくの如くして生物は皆な「生命」を愛して居る。

然し皆んなその愛する生命も畢竟は「死に行く生命」にしか過ぎないではないか。

イヤ、それは「死に行く生命」だからこそかも知れない。「死ぬことのない生命」なら、こんなにまで愛しはしないであらう。それ程までに尊い短かい「生命」なのである。

限りがあるから尊いのであり、愛するのであり、執着するのであらう。矛盾でない矛盾なのだ。

そして其處に初めて宗教的な「無量壽」への憧憬も生れて來るのである。

それにしても私達人間は餘りにも其尊い「生命」を浪費することに馴らされて居る。

獨り人間ばかりでなく、凡ての生物は皆なさうなのではある

が、他の生物よりも、より高い感情を持ち、より高い理智を持つて居る筈の人間が、どうしてまあかうも「生命」に關する限り無知なのか、全く底が知れないのである。

靜かに瞑想すると、私達の周圍にあるもの皆なが、私達人間の「生命」浪費にのみ營々として展開されて居るやうにさへ見える。

色々な近代的文化施設も、結局私達の生命を浪費させて居るに過ぎないのではないか。

私は今自分の吸つて居る煙草にさへ反感を感じて居る。

耳に響いて来るラヂオの音にさへ反感を感じて居る。

こんな感情は無論正しいものではないだらう。

社會と云ふものは「生一本」では生きて行けないからである。

だが、其の「生きて行く」ことは畢竟「死につゝある」ことに過ぎないのである。

少くとも私自身「如來」の中に自分の「生命」を見出すことを、法然上人の宗教に依て教へられ、そして、それが些やかながらも自分の「信仰」となつて居なかつたなら、今頃は何うなつて居たか判らないとも思へる。

實際自分の生活を反省して見れば、殆んどその全部がくだらない時間で浪費されて居たのに氣がつく。之ではならぬと、自

分で自分に言ひ聞かせるけれども、事實は愚圖々々愚圖つゝ居るだけなのである。

然しそこには救はれる道もある。それは宗教であつた。

私の知つて居る尊敬すべき或る聖は、

「ぐづ／＼して居ると日が暮れる」

と、常に述懐して居られた。それを聞く度に私も、

「本當にさうだ。私もぐづ／＼しては居られない」

と痛感したものだつた。そして我れ知らず宗教へ突進して行つたのだつた。そしてそれから、ものゝ二十幾年の歲月が流れて行つた。思へば早い年月ではある。

此間近頃評判になつて居る「大地」を讀んで居たら面白い事が書いてあるのにぶつかつた。

其國の人を養ふ大地は、祖先以來の骨を埋めてすつかり飽和状態になつて居るか居ないかで、野性を失はずに居るか居ないかの差があり、そして其感化で、いくら富と學識とがあつても、其國の人々は野蠻か野蠻でないかに分れると云ふやうな意味であつたと記憶して居る。

無論誇張した云ひ方ではあるが、一分の眞理はあるやうである。

凡ての生物は大地を離れて生きて行けないのだから、其意味で凡ての生物の生命は皆な大地に育まれて伸びて行き、そしてそれをまた大地へ返して行くと云へないこともない。

然しそれは肉體の一定期間の生命しか眺めて居ないのでなからうか。

尤も大切な無期限な「命」に就ては考へて居ないのである。

無論次代へ次代へのつながりの意味に於ては、身體の生命も精神の生命も、此の大地が潰滅しない限り存続して行くと云へるけれども、一箇の意識された「私」の生命に就ては、それでは餘りにも愁しく餘りにも物足りないのである。

もつとハッキリ自分の「永遠の生命」を意識して、力強く此大地を踏みしめて行きたいのではなからうか。

吉田松陰はこんな事を云つて居る。

「十七八の死が惜しければ三十の死も惜しい。九十、百になつても、之で足りたと云ふことは無い。天地の悠久に比べれば、松や柏の數百年も、一時の蠅の命と同じである。抑も何年生きれば氣が済むことであらう。浦島、武内も今は死人である。人間僅か五十年。何か腹のすくやうな事をして死ななければ、成佛は出来ない」

さすがにいいことを云つて居ると思ふ。

「何か腹のすくやうな事をして死ななければ、死んでも死ねない」と云ふ氣持は、誰にでも判る。そして誰でも自分の云ひたくて云へなかつた事を云つて貰つたやうな氣もするのである。

餘りに年をとつて居たり、餘りに物質の中に取つかまされて居る人には、若い人程には感銘も強く起らないかも知れないが、それにしても自分の過去に一度や二度、かうした氣持に血を沸かしたことの無い筈はない。

それは皆な「永遠の生命」を欲して居るからである。

だからせめては「腹のすくやうな」自分の腹のドン底に物足りないで居る「生命への欲求」が満たされるやうな仕事をして、幾分でも消化されずに居る氣持を消化させたいのである。

つまりは永遠に残る仕事をして、それを自分の「永遠の生命」としたいのである。

それで色々分相應のことを考へる。

だが、色々の環境や因縁に左右せられて、中々「腹のすくやうな」仕事が見付からない。

そこで大抵は一番手近な「我が家の發展」と云ふことに歸着してしまふ。

そしてそれと思ふやうにはならず、徒らに年月を浪費して

年を取つて行くのである。

然しそれで本當に「腹がすくやうな」ことになるのであらうか。

少くとも「小我」を捨て去らない限り「腹はすけない」のである。

それで團體のことに骨を折つたり、國家的な仕事の方へ目を注ぐやうになるのだが、それは其人の地位・環境・教養などで可能でもあり不可能でもあつて簡單に事は運ばない。

大概是吳下の舊阿蒙に終つて仕まふのである。

然し何んな事をしたつて「小我」を捨てない限り腹の底から満足するやうな仕事は出来ない。

随つて本當に「小我」を捨てゝやるなら、何んな小さな仕事でも「腹はすける」のである。

此處に宗教がある。

佛教の「聖道門」と云ふのは其「小我」を捨てる理論を實踐に移して刻々に修養して行くことである。

だがそれは中々出来ない。何故なら、容易に「自我」は破れるものでないからである。

そこへ行くと、法然上人の教へは端的である。

つまり「南無阿彌陀佛」の聲に依て、たとへ瞬間でも「小我」が破れるからである。

「一念に一度の往生を當てをき給へる願なれば念々毎に往生す」

實に不思議な實現法である。

「一念即得無上大利」

とも云つて居るが、本當にさうだと思ふ。

其處に苦もなく「永遠の生命」に就ての認識が深められ、そして「腹がすけて」行く仕事が些やかながらも出来て行けるからである。

肉體の生命には永遠性はない。

然し肉體を通して現はす「小我滅却」してする仕事の、幾分づゝでも出来て行くのが嬉しい。

日はだん／＼かげつて行く。

それでもまだ日は鳴き止まない。

よくもあんなにシヤベリ續けられるかと感心させられる。

人事ではない。

私も念佛にいそしまう。

「愚圖々々して居れば人生の日が暮れるから」



浄土に生きる

齋 藤 要

ある時、一人
のお婆さんが、
「和尚さま、お
浄土へまゐるた

めにはどうすればいいのでありませうか」

とたづねた。この時老僧は一枚のちり紙をお婆さんにさし出して、

「お婆さん、これを上げよう。お浄土に往く、ただ一つの道だよ」

お婆さんはそのちり紙をいたゞいて、表や裏をためつすがめつし

ばらく見てゐたが、何のことやらさつぱりわからない。やがていか

にもけげんさうな顔をして、

「和尚様、これを一體どうすればいいのでせうか」

と、たづねた。老僧は始終の様子をにこにこしながら見てゐたが、

「お婆さん、お解りになりませんか。お解りにならないなら訓へ

て上げませう。ちやが、そのちり紙は何に使ふものか御存知か」

三歳子でも知つてゐるやうなことをたづねられてお婆さんは慙々として喰つたが、老僧が今までとは打つて變つた謹嚴な態度だし、別にか

らかはれてゐるとも思へないので、

「尾籠なことでござりまするが、これは鼻を拭いたり、ご不浄で使

ひますもので」

「さあそこぢや、——」

と老僧は少しの隙も興へず、たたみかけて言つた。

「それがお解りなれば、拙僧が、いま進上たちり紙のわけもお解り

になるはずぢや。人は身についてゐるきたないものは必ず拭き取

る。汚穢ものをからだにつけたまま平氣である人はあるまい。だ

のに、心の汚れを拭きとることは怠りがちなものぢや。お婆さん

も毎日顔も洗ふし、鼻汁が出れば拭きとる。便所に行つて拭く

ことを忘れることもあるまい。しかし、心についた汚れや、心に

流れ出た穢いものを、それほどいいねいに拭き取つてゐますかね。

ちようどからだに汚穢ものがついてゐては、人の中に出られないやうに、心に汚れがあつては佛の淨土に行くことはできない。拙僧がこのちり紙を進上したのは、この紙でからだの穢れを拭き取るやうに、心の汚濁を先づ拭き取りなされと申すことなのぢや。欲が出たら欲を拭き取り、ねたみ、うらむ心が起ればそれをぢきに拭きとる。邪念な心と見ればそれも跡形もなく拭く、出れば拭き取り、生起て来れば拭き取る、さうしてゐる間に心の汚濁が消えて、谷川の清水に映つた秋の夜の月のやうな、磨き上げた鏡のやうな心となる。さうすれば、そのままに淨土なのぢや、死んでも未來はきつと淨土に往み、死して淨土に往くことが佛の道を行ずることとでありますから、先づ心の曇、心の汚れをよくお拭きなされ。お婆さんはやつと解つたらしく、こんどはほんたうにいていねいにちり紙を折りたたみ、幾度も押しただいて歸つて行つた。

南無阿彌陀佛と唱へ奉れば、彌陀の本願によりて未來はみ佛の淨土に往生することも、もとより疑ひなかるべきものであらう。然し未來の淨土往生を願ふと共に、現世においてもみ佛の本願の力に纏つて淨土安住のよろこびに生きて行かなければならない。それがほんたうの人としての幸福である。

人間、生きて行くためには誰れにも欲がある。眼に見るもの、耳に聞くもの何でも自分のものにしたいと。それもよい。だが、それを自分のものにするためには、それだけの徳が我になければならな

い。得は徳である。得ることは徳の力によらなければならない。金を所得するにはやはりそれだけの徳が必要である。地位や名譽を獲得するためにも、それに相應する徳がなくてはならない。だからそれは自分で取得するのではなく、その人の徳に與へられるものである。徳とは道徳上の徳といふばかりの意味ではなく、力をも意味する。その徳が自らに無くして、取得せんとするものを盜といふ。

人間を最も不幸にするのは、所得する力の徳を有たずにこれを欲望することである。欲求すれば先づ退いてそれに足だけの實力としての徳を修めることが必要である。そして、それは飽くなく欲求することによりて満されるものではなく、欲望を捨て我執を去り、虚心なることによりてのみ達成せられる。私等にはこの我執があつて虚心なることができないために、どれだけ無駄な苦みをしてゐるかわからない。

*

ある所に若き二人の武士が居た、歳も同じく、同門に劍を學びその力量も優劣なく二人は兄弟以上に親しかつた。或る時二人はより深き劍の奥義を極めようと相談つて、武者修業に出た。その出立の日、二人は氏神に参詣し「南無産土神、並に弓矢八幡も御照臨あれ、我等二人、劍道の奥義を極め達するまでは、誓つて女人を近づけまじ、酒盃を手にするこゝとあらじ」と、誓願したのである。

かくして幾年かの歳月が流れ、二人は愈々劍道に鍊達して行つ

た。ある時、二人は朝早く宿を出て立つて、次の城下への道を急いでゐた。すると、途中川があつてそれにはただ丸木が二本架けわたしてあつた。水面までは四五間もあり、川幅もかなり廣かつた。二人の武士は勿論そんなことは懼れることはない、平氣で渡らうとすると、そこに一人の若い美しい女がぼんやり佇んでゐる。一人の武士はその女に眼も呉れないでさつさと渡つて行つた。一人の武士は渡りかけてすぐに引きかへして女の側へ来て、やさしく、

「お女中、この橋が恐ろしくて渡れないでゐますか」

とたつねると、女は

「ハイ、どうしても恐ろしくて渡れません」

と答へた。武士は、

「よろしい、それでは拙者が渡して上げよう、眼をつぶつてゐなさい。何、心配することはない」

と言つて、その女を抱き上げた。女は武士の頸から脇に両手でしっかりと抱きついてゐる。先きに渡つた武士は、渡り終つた時後をふりかへつてこの様子を見て同伴の武士を待ちもせず、サツサと歩いて行つた。後の武士は重い女を抱いてゐるので極めて用心深く渡つた。やつと渡り終ると、武士はその女を靜に下ろして、女がいてねいに禮を言ふのを後に聞いて、大急ぎで前の武士を追かけて、五六町も行つたとき追ひついた。前の武士は怫然として黙々として歩いてゐる。女を渡してやつた武士をちらりと見ては、ただ急ぐだけで

あつた。やがて正午になつたので、二人はとある丘で辨當を食べた。いつもは二人並んで景色を賞しながら楽しく語り合ひつつ食べるのに、今日に限つて、前の武士は一言も語らず、五六間も離れて、しかも背を見せて食べた。

それからまた二三里も歩いて城下に着いた。二人は早速、その町の道場に行つて試合を申込み、二人とも道場に通された。挨拶もそこそこにしてよし拙者がと、一人の武士が立ち上つた。ここの道場の主人は精悍さうな顔であつたが、竹刀をとつて立ち向つたところは、これまで二人が幾百回となく試合をした他の劍士に比べて、中以下ではないが、またそれ以上でもないと思はれた。この勝負は問題ではないと思つたのに、どうしたとか、立ち向つた武士の竹刀と心とはまるでかけ離れてゐる。雀が毬を拾ふやうに落ちつきがない。氣合が竹刀にちつともあらはれて來ない。これまで多年の劍の修業が死んでゐる。あつと思ふ間に、もろくも打ち破られてしまつた。代つて、もう一人の武士が出た、女を渡してやつた方の武士である。道場の主と、武士は一禮して立ち向つた。やはり格段な腕の相違がある。竹刀を持つて立つたところ、深淵に横たはつてゐる後のごとき靜けさがあり、刀尖に光る氣合の力、氣魄の鋭さは鐵火のごときものがあつた。二三合も打ち合はす間もなく、道場主は竹刀を捨てた。

二人は夕陽が西の空をまっ紅にするころ、この町の旅人宿に落ち

ついた。すると一方の武士は、
「おい、明日から貴公と拙者とは別々に行くのだ」と突然言ひ出した一方の武士はこの突然の絶別の話に驚いた。

「それは又何としたことか。」

これまで四年の長い間一所に修行し、あと一年足らずで歸郷しようといふのに、今更突然そんなことを言ひ出すのはどうしたわけか。

そればかりではない。今日の貴公はどうも變だ。いつも腹立たしさにしてゐるし、今日の試合のことは言ひ度くはないが、當然勝つべき實力があつて、思はぬ不覺をとつてゐる。貴公今日はどうかしてゐるのだ、まあ心を落ちつけて考へなほしたがよい」

「何、拙者がどうかしてゐるといふのか、亂心でもしたといふのか。それは貴公の方だらう。何だ、今朝のあの醜態は、故郷を出



るときお互に弓矢八幡にまで祈誓を立てておきながら、若い女を抱くなどとは以ての外のことぢやないか。貴公のやうな者と一緒に劍の道に精進することはいやだ、第一武士道の冒瀆だ。斷然明日からの同行をことわる」

と言葉もきびしくつめよつた。すると一方の武士は腹の底から湧き出るやうな大きい聲で朗らかに笑つて、

「あゝさうか、それで怒つてゐたのか」

それから急に相手を憐むやうな、いたはるやうな眼を見せながら、しんみりとした調子で言つた。

「貴公はあの女を今まで抱きしめてゐたのか。なるほどそれで貴公の心はその平靜を失つてしまつてゐたのだ。心に女の幻影をしつかり抱いたまま勝負をしたから、勝つべきのに負けたのだ。貴公は、いや女を抱いたのは手前で俺ではないといふかも知れない。さう思つてゐるから腹が立つとも言へるが、よく考へて見たがよい。その位のことのわからぬ貴公でもあるまい。拙者は女を女として抱いたのではない。貴公は女を女として心に抱き、それに執着してゐたのだ。貴公の氣持ちもわからないではないが、今一步突き進んで考へると、やはり女を抱いてゐたのは貴

公の方で擲者の方ではない」

聞いてゐた武士もほつとして顔を上げた。その時にはもう何のこたはりも、にくしみもその顔には無かつた。

「さア明日も早立ちだ。あんな女なんかをいつまでも抱いてゐずに、おろしてしまつてゆつくり休むことだ」

と言つて、再び朗らかに笑つた。

我執妄念を捨ててこそ淨土に生きることが出来る。私たちは、實につまらないことに執着をもち、幻影におびやかされて、自ら自らを苦しめてゐることが多い。

我執妄念無きところは是れ淨土。虚偽欺瞞無きところは是れ淨土。怨恨嫉妒無きところは是れ淨土。静寂虚心の三昧境即是れ淨土。

人間には人間なるが故に負はされて、なやみもあれば、うれひもある。だが、そのうれひやなやみは、ただほんとうに生きんがために外ならない。畜生さながらに生きてゆく人には、おそろくなやみもあるまい、うれひもあるまい。然し、我々はさうした人を決して幸福多き人とは思はない。ほんとうに生きんとする人の、まことの心と、現實のすがたとの相剋がこの煩悩であり、苦悶である。煩悩や苦悶それ自體の中に、すでにほんとうに生きんがためのまことの心が有ると見るべきである。煩悩あればこそ求道の精進もあるし、苦悶あればこそ欣求淨土の發願もある。私等は煩悶苦惱の外に淨土を

求めることはできない。煩悩即菩提であり、苦悶即淨土である。現實の世界そのまゝの中に、人間としてのものもろのなやみやうれひの中にのみ、まことの淨土への道がもとめられてゆくのである。

誰にも出来る貯金

貯金は誰れもが仕度いと思つてゐながら仲々出来ぬものですが、それも結局は氣持の問題で、本當にその意志があれば普通の生活で貯金が出来ぬ筈はありません。この超非常時局に一層奮發して貯金をしたいものです。

天引貯金 これは積極的な貯金法です。餘つたら、なぞと考へずに収入があつた時に、家賃、米代などと同様に絶対に必要なものとして一刻だけ天引して貯金してしまふのです。但しあとのやり繰をうまくやらねばならない。

つもり貯金 映画を見たつもり、一杯飲んだつもり、自動車にのつたつもり、でそれ丈のも

のを貯金する。だから、映画を見たつもりで公園を散歩する、御馳走をたべたつもりで有合せで間に合はせる、自動車のところを電車にと云つた具合で餘分なものを貯金するのです。

お拂ひ物貯金 東京市の塵芥取扱所で塵芥焼却前に拾ひあげるボロ屑、紙屑などだけで毎年二萬圓あります。ですから古新聞、ボロ、瓶、チューブ、ニューム、錫など無暗に捨てずに屑屋に賣つて、それを無駄にせず貯金をします。

念佛貯金 毎朝、佛壇や神壇を拜む時に一錢でも二錢でもお賽銭をあげて、それを月末毎に總めて貯金します。淨い貯金が出来ます。

短歌

興謝野晶子選

一等

東京 小泉 妙春

ねんごろに母のみたまにたてまつ

る茶の湯け白き冬の内房

(評)

内房と云ふ言葉で、家の女の君達の
幾人かの住まれる所がよく説明され
その何れもが故人となられた優しい
婦人を思ふ気分が流れて見えます。
静かな境地である。

二等

北海道 寺田 頼山

大神の宮の堅魚木光るなり朝日か

かやくみそのの奥に

(評) やや遠く神の宮居を拜して作者は立
つてある。神苑の中に。

三等

大阪 小山 文二

高ければ竿の届かぬ枝にして残れ

る柿の目立つこのごろ

木枯と云はんに過ぎぬひよりひよ

りと玻璃戸をゆする風のけうとさ

(評)

初冬の村の住居の微笑まじさがよく
見え、氣候は冬と云つてもまださう
極寒でないことが解る。次の歌の方
は其れ程のものではない。

仙臺 三浦 頼子

はらからは母をかこみて北國の冷

えのしむ夜に爐をかこむかな

東京 三野輪江雪

大君に捧げまつらんわが子ぞと育

てし母に掌の合はさるる

岡山 横江 史枝

み戦の野の寒さなど思ひつつ今日

も畑打ち鋏とりて過ぐ

小倉 益田 慧光

興り行く國のさま見んその日まで

命あらんとのたまふ翁

和歌山 奥村 映水

みいくさの勝をいのりて朝晴れの

みやしろまかる心地清がしも

うらうらと明け渡りたるひろ前に

み鈴の音す戦捷の春

千葉 高橋美矢子

髪洗ひ春まつ宵のしづかなり餅ひ

切り終へおのれ安けし

福島 安齋 四郎

ふりつもり尺なす雪の朝の道わが

先づ歩む足跡ぞよき

朝鮮 蟹江 廣吉

初春のひざしを病める身に浴びて

よき年得んと力湧き出づ

奈良 奥田 竹陰

初春となれば思ひぬわが母は髪結

ふことの巧みなりける

朝鮮 蟹江八年坊

うつふして戦の庭を思ふかなみ雪

の前に香捧げつつ

長野 中山 弘

幾年を病みて過こせと變らざる君

が情けに常春を知る

北海道 花田 順佳

日の本の正しさ知らでよこしまの

心を抱く支那はかなけれ

大阪 細木 隆

戦勝を聞かず散りたるつはものの

み雪思ひて念佛すわれは

京都 永田 七郎

水のごとこだはらずして世を經れ

ば心は常に清く澄むらん

京都 福島孝治郎

ますらをの猛きいさをし見つつ猶

立たずばなどて男の子と云はん

大阪 吉廣 夏生

叱りしを悔いてやさしく子を呼べ

ばすねながらにも抱かれに來し

〔投稿規定〕

官制ハガキに一回二首以内本社

歌壇係宛に送ること

現代
小説

眞^{しん}
實^{じつ}
の
閨^{やみ}
路^ち

野原完二郎
大羽四郎畫



「綾江さん、今夜は、暇なんだらう？……どうだね、これから飯でも喰ひに行つちやあ？」

高野は、ウキスキーのグラスを、唇から離すと、綾江の顔に酔眼を据ゑて、言つた。

「何時までねばつて居たつて、満足にチップを置く客は、來あしな
いぜ」

「え、ありがたう……でも……」

と、綾江は、むら／＼と湧き上る反抗心を感じながらも、微笑だけは忘れず、

「このお店は、かう見えても、案外やかましいんですの、たとへ時間過ぎでも、お客と一緒に歩いてゐるところを見られると、鹹になるんですの」

「鹹に？……は、う、う、う、そいつはいいや」と、高野は哄笑しながら、
「綾江さん、何もそんなことで、ビク／＼するには當らないぜ。鹹になつたら鹹になつたで、わしが面倒を見てやるよ。ひと月、二百圓もあつたら、いいんだらう、え？——綾江さん」

「……」
「とにかく、何處かで、ユツクリ談をしようや、何ならわしが支配人に話してやつてもいいぜ。——第一、ろくに客も來ないカフェーに縛つて置きながら、そんな生意氣な規則を拵らへるのは、支配人が悪い——」

高野は、さう言ふと、立上つて、フラ／＼とボックスから出ようとした。綾江は、慌てて、遮切りながら、

「高野さん、止めて……そんな事をされてはあたし困りますわ」

「いいよ、いいよ、何も心配なぞすることはない——」

「でも、あたし、ほんたうに困るんです」

綾江は、しかし鹹になるのが怖いのではない。かうした女給稼ぎな

ら、何處へ行つても雇つてくれる。——だから、むしろ惧れるのは、高野の、かうした執拗な誘惑なのであつた。

高野は、近ごろの軍需インフレで、莫大な利益を擧げつつある、或る鐵工場主で、金のあるのにまかせて、美貌な女と見れば、誰かまはず弄んで得々としてゐるのである。現にこのカフェーにゐた女給でも、その毒牙にかかり、泣いてゐるものがある。

「我ままを言つて、ほんたうに済みません」

綾江は、しかし、高野の氣隙を損ねぬやうに言つた。——かうした缺點さへなければ、このカフェーにとつても、自分にとつても、上客だからであつた。

「いつか、こんど、公休の時にでも、ユツクリお伴させて頂きますわ」
「冗談言ふなよ、そんな豪辭は何度もきいた、——綾江さん、おれは氣が短いんだ、いい加減に、わしの言ふことをきいてくれたら、どうだ？」

そして今度は、綾江の手をとつて、膝の上に抱へようとした。

「止して……高野さん止して頂戴——」

熱捕くさい息もさる事ながら、肌に觸られるのが、とても耐らなかつたのだ。綾江は、極力抵抗した。が、酔つてゐても、男の力には勝てず、危ふく、高野の胸に抱へこまれようとした。

その時だつた。

「綾江さん、警察の旦那が呼びですよ」

争つてゐる二人の處へきて、少年ボーイが言つた。

「え？——警察の……」

その言葉で、思はず弛んだ高野の腕からやつとのがれた綾江は、キョトンとして、

「あたしに？……一體、何の用かしら？」

「さあ、僕にも分りませんが、支配人室で待つて居ますよ、早くきてください」

「え、……行くわ」

綾江は、亂れた髪を直すと、妙に不安な氣持で、支配人室の扉を開けた。

「やあ、暫らくだつたな、——まあここへ掛けろ」

と、綾江の姿を見て、直ぐに聲をかけたのは、部屋中央の卓に、苦り切つた顔の支配人と相対してゐた、見知り越の富田刑事であつた。

「何かご用でせうか、あたしに——？」

綾江は、おづく／＼と進んで言つた。

「うむ、早速だが、また井上のことだ。」

「えッ？」綾江は、井上といふ言葉に、ギョツとなつて、「井上が、どうかしたのでせうか」

「また、拘つたんだ——先刻新宿驛の構内で、しかも、儼の見て居る

前でな」

綾江は、瞬間聲も出なかつた。脳裡に、突風が捲き起つた感じたつた。

井上といふのは、綾江の戀人で幼いころからの許婚でもあつた。が、

井上の父が事業の失敗の爲に失踪し、また綾江の両親が相前後して他

界したりするやうな不祥事のため、お互に故郷を見捨てなければなら

なくなつて、永い間、夢にのみ思ひを通はせるやうな日が流れた。と

ころが、つい半年ほど前に、Mデパートの店員を勤めて、孤獨な生活

を送つてゐた綾江の前に、瀟洒とした背廣服姿の井上友吉が、ヒョツ

コリとネクタイを求めに現はれ、その奇遇に愕くと共に、交情は過去

に倍して、魅り、奔流の勢ひを以て愛の復活を見たのであつた。しか

し綾江のこの喜びも束の間、相離れてゐた歲月の間に、井上は道を踏

み迷ひ、拘摸といふ忌はしい境涯に墮ちて了つてゐたのである。年老

いた老母を抱へ、地方の町から東京といふ大都會に始めて出てきた井

上に、いつになつても適當な職が興へられず、飢が日一日と迫つてき

てゐたからであつた。

が、事情はとにかく、綾江がそれと知つた時の驚愕、天地の一時に

崩れ落ちる程の思ひがしたが、すでに郊外のアパートに同棲してゐた

後だつたし、井上の戀に汚れた身を、もとの清い體に返すことが、眞

實の愛だといふ事に氣がついた綾江は、生活の負擔を一身に背負ひ、

デパートの店員からひと思ひに、この女給生活に飛びこんだのであつ

た。そして、時々井上の行狀を窺ひにくる富田刑事に、亢然と言つた



のである。

「友吉は、決して悪い事はいたしません。私が女給勤をして居れば、親子三人、ご飯を敷くには不自由をしませんから、友吉はそんな悪い事をする必要がないのです」

富田刑事もそれで稍々了解したらしい。

「さうか、さういふわけなら、僕はもう井上を監視せんから、君が今後の責任をとつてくれ」

「はい、承知いたしました」

綾江はかくて富田刑事に立派に誓つたのであつた。

ところが、いま聞けば、再び友吉が拘捕を犯したと言ふ。——信じられない、信じられない。綾江は頭をふつた。

だが、富田刑事は、語を次いで、

「慥かにこの目で見ただから間違ひはない。それに金額もちと大きい。——出札口で汽車の切符を買はうとしたある令嬢から拘つたのだが、その令嬢の訴によると三百八十圓ほどだといふ。むろん僕は直ぐに後を追つたが、井上の奴、例によつて兎のやうに遁げてしまつた、……綾江、かれの一切については、お前が責任をとる約束だから、今夜直ぐに歸つて、井上を警察へ連れてこい。——自首さへすればお前の顔に免じて、僕が特別にはからつてやらんでもない。——分つたか、綾江……」

「——はい」



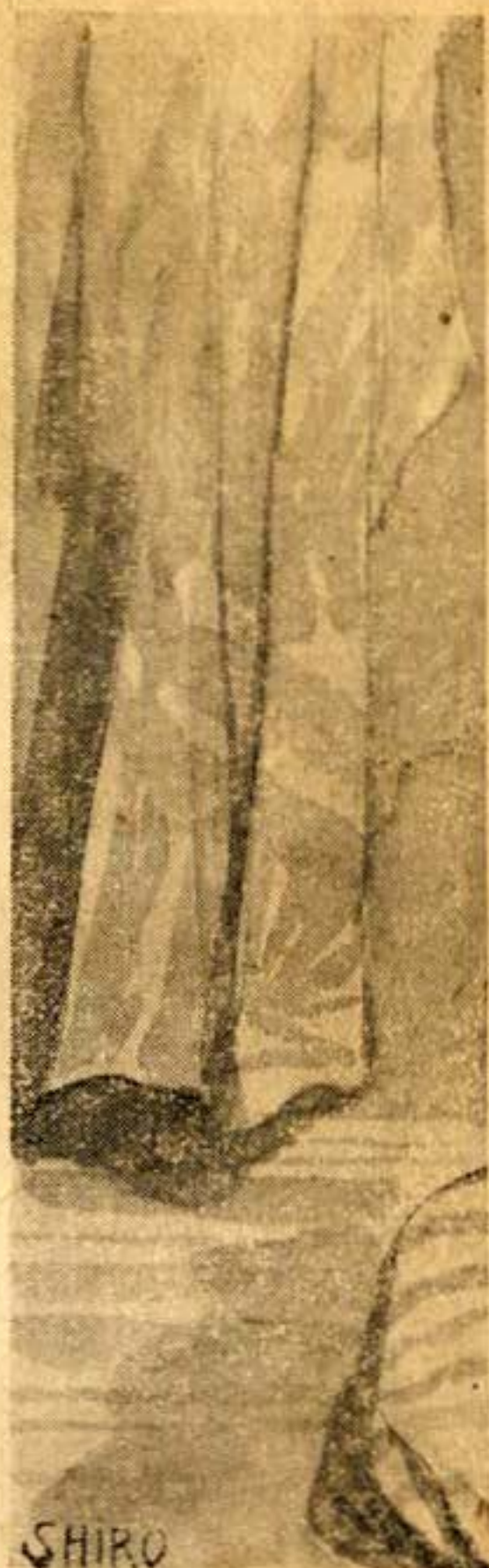
呆然たる綾江の目に、燈を受けた泪が、キラリと露のやうに光つてゐた。扉一つ距てた彼方から、酔漢のだみ聲に混つて、同僚の嬌笑が、高らかに聞えてゐた。

三

ボン、ボン、ボン……鈍い音をたてて、湖の底のやうに静かなアパートの何處かの部屋から時計が三時を報じた。

「まあ！ 三時だと言ふのに、一體何處へ行つてゐるのか知ら？」

綾江の不安は、焦燥にまで驅り立てられた。——かの女は、富田刑事にあれ程言はれても、まだ半信半疑であつた。友吉は自分がカフェーに勤めるやうになつてから、更生を誓ひ、毎日足を棒にして、職を探してゐるのである。それにたとへ貧しくとも、自分の稼いで暮して行ける現在、危険を冒し聲ひを破つてまで、さうした悪事を働く必要がある筈がない。何かの間違ひではないか、どうか間違であつて欲しい、——と、カフェーからの歸途も、綾江はさう考へながらアパートに戻つてきた。ところが部屋に入つてみると、電氣



も灯いてゐず、そこに居る筈の友吉はおろか、友吉の母の姿まで掻き滑すやうに見ないのだ。——理由はまつたく判らない、事務所の管理人に聞いても、生憎留守にしてゐたから、何も知らないと言ふ。

かの女の疑惑は不安に變り焦燥にまで發展した。が、この深夜どうする事も出来ないのだ。——ふと氣がつくと、硝子窓に、雪が凍てついて、サラ、サラと、異様な音をたててゐた。

「あら、雪——」

寒さが、腹のなかまで沁み入るやうに、急に感じられた。見ると、炬燵の炭火も、いつかスツカリ灰になつてしまつてゐた。

「お母さんも、あの人も、この雪のなかを、どうして居るのかしら？」

とり残されたやうな味氣なさ、砂を噛むやうな佗びしさ、綾江は耐らなくなつて、力一杯に叫びたいやうな衝動にすら驅られた。だが、思ひ疲れて、かの女はいつか眠りに落ちた。——どのくらゐの時が流れたらう、かの女は、ふと、耳近く人の足を聞いて、ハッと目を醒ました。

「誰？」

と、急いで見上げる目に、雪に滄れた友吉の姿が幻のやうに映つた。

「まあ——あ……あなた——」

夜はスツカリ明け放れて、かれこれもう正午に近い。雪は相變らず降り止まない。

「一體、何處へ行つてらしつたんです？」

綾江は直ぐに言つた。

「……」

「あたし、ぜひあなたに、お聞きしたい事があるんです？」

相變らず無言で立ちつくしたままの友吉の顔は、紙のやうに眞つ蒼だ。氣がつくと、その手に、筆箱から引出した母親の着物が、ダラリと握られてゐる。

「あら、お母さんの着物を、——それをどうなさるんです。それになたは、お母さんを何處へおやりになつたんです！」

「綾江、赦してくれ、おれは追はれて居るんだ。この着物を阿母に渡して、姿を隠さにやならないんだ」

友吉は、突然、呻めくやうに言つた。

「え？——では、やつぱり……」

綾江は、富田刑事の言葉が嘘でない事を知つた。——慄然たるなかに、心は恐ろしさで一杯になつた。

「ええ、知つてゐます、あなたが悪い事をした事は、富田さんから聞きました。あんまりです、あんまりです、……あたしがこれ程までに、眞剣に、あなたの爲につくしてゐるのに、それを裏切るなんて、あなたは恐ろしい恐ろしい人です……。直ぐに自首してください、富田さんも、あたしにあなたを連れてくるやうに言ひました！」

「えッ、さうか、お前はもう知つてゐるのか」

と、友吉の顔は、一層蒼ざめ、

「だが綾江、おれには自首は出来ない、——おれはあの金を使つて了つた……金を返さなければ、自首をしたつて、罪は軽くなならない。堪辯してくれ、見廻してくれ」

「いいえ、いけません——自首してくださいッ」

と、友吉に纏りついた綾江は、木の葉のやうに唇を顫せて、尙ほ叫んだ。

「それでは、私があまりに可哀相です、これまでの苦しみが、水の泡になります——」

友吉はそれを聞くと、ギョツと胸を衝かれたやうに、綾江の顔を見たが、

「綾江、おれも苦しい。だが、これには理由があるんだ」

と言つて、

「綾江、一緒にきてくれ、おれが何故拘捕をやらなければならなかつたか、その理由を教へよう、一緒にきてくれれば、凡て判るんだ」

そして綾江を引立てるやうに、粉雪煙る戸外に連れ出すと、折みを駛つてきた圓タクに綾江を乗せた。

四

やがて、圓タクが停まつた處は、門柱にK病院と金文字で書かれた廣莊な建物の前であつた。

「まあ、K病院？」

「うむ、黙つて跟いてきてくれれば判る」

友吉は、門衛に會釋をし、受付に斷つて、薬品の包ひの高い、奥深い廊下を、右に左に曲つて、綾江の腕をとつて歩いて行つたが、とある病室の前に立つと、

「ここだ、内部に入つてくれ」

と、扉を開けた。綾江は、言はれるままに、病室に一歩足を踏み入れたが、

「あつ——」

と言つて、棒立になつて了つた。その病室のベットのの上に、頭から胸にかけて、繻帶を巻かれ、氣息奄々と横たはつてゐるのは、友吉の母親であつた。

「まあ、お母アさん!?」

綾江は、頓にはあとの言葉が出ず、凝然と立ちつくしたが、やつと、
「ど……どうして、こんなお怪我を？」

と、友吉を顧みた。

「自動車に轢かれたんだ——」

「えッ、まあ……」

「アパートの爺さんから、映画館の切符をもらつたので、阿母に見せてやらうと、昨日連れて行つたんだ。電車に乗ればいいのを、勿體ないからと、歩いて行つたのが不運なんだ、やつとその映画館の裏手の曲り角まで来た時、ふいに飛び出してきた圓タクに刎ね飛ばされ、あつといふ間もなく、この始末——やつとの事でこの病院に擔ぎこんだけれど、先立つものは金なんだ。——といつて綾江、おれには一文の稼ぎもなし、お前に話したところで、急にまとまつた金が出来るわけではなし……いや、お前の事だから、或ひは何とか都合をつけて呉れるかも知れないが、しかし……しかしおれには、これ以上に、お前に苦勞を掛けたくない、また掛けられた義理でもないんだ。——綾江、な？——分つてくれるか、だから、思ひ切つて、おれは拘捕をやつた綾江、さういふわけだ、おれは、決して好んでやつたわけではないんだよ……」友吉の目には、涙が一杯溜つてゐた。

「済みません、あんな怒つたりして——」

綾江は、何も言へなかつた。——言はれてみれば、友吉の悪事にも一理がある。けれども、いくら理窟があつたところで、悪事は悪事、それが消える筈もない。ことに、奪つた金を、費消して了つたままで、自首してみても、相當の罪に服しなければならぬだらう、とい

つて、自首しなければ、他日一層重い科を受けなければならぬし、

(ああ、どうしたらいいのかしら?)

綾江の胸は、暗澹として、文色も分らぬ悲歎の闇にとざされた。(お金さへあれば、お金さへあれば……)

が、やがて、綾江はハツとした。——ゆうべも、店で自分に挑んできた、高野の言葉を思ひ出したのだ。

(いい加減にわしの言ふことをきいたら、どうだ?)

(鹹になつたら鹹になつたで、わしが面倒を見てやるよ、ひと月、二百圓もあつたら、いいんだらう、——え?)

かの女はこの言葉を反芻しながら、意を決して立上ると、病院の電話をかりて、高野の家に電話をかけた。自分を犠牲にしよう……

「高野さん? 私綾江です……」が、彼女は高野のだみ聲を耳にした

時、突然横を何者かにはつしと撃れたやうな氣持がした。(さうだ、妾がこの身體を犠牲にして得るところのものは何んだらう? 再び罪

を繰り返すやうなものではないか? お母さんと友吉さんを裏切り、助けることにはなく仕返しをすることになるのではないか? 働か

う! 困難と戦はう! 正しく強く。弱くとも、世間と、神様と、佛様とにお縋り申して、雄々しく。)

彼女の目の前が急に明るくなつた。高野が何か喚いてゐる受信機をそのまゝ、ガチャンと掛けた。彼女の泣きぬれた顔から決意にみちた眼が美しく輝いてゐた。(終り)



筆：隨

明日知れぬ命

生 田 花 世

「夜半に嵐の吹かぬものかは」明日知れぬ命だといふことを書き、こまごまと現地事情を知らず遺書のやうな手紙が、北澤、佳木斯の日本屯營で活動してゐる勇士からおくられて來た。この勇士と私との間につづく血肉の情が、私の心に一本の動脈となり、いつでも、心配のおちつかない脈搏を打つのである。この手紙が、あるひは、最後になりはすまいか？ 封を切つて讀んで、二度も三度もくりかへして見ては、武運長久を祈るのである。丁度四通目の手紙をもらつた間に、隊長からの葉書をいただいた。それによると、何しろ危険な第一線なので、いつ、どのやうな事態となるかわからぬが、軍人としての武名

は立派に立てさせるやうに指導するからといふお言葉であつた。隊長自身としても、明日知れぬ命だといふ事を充分に考へられての上のお言葉だといふ事がよくわかる。

私は、御國のために、明日知れぬ命、生死紙一重の間に立つこの遠方の人たちの事を考へ、風が吹くと、又、夕空がよく晴れて、西方に朱の色のきらめく時、何ともいへない氣持となり「どうぞこの日、この時、御無事に」と深い祈りをするのであつた。然しながら、又、時には苦になつて何も手につかぬ事があつた。そして思つた事は、これが、我が子我が夫といふ事だつたら、もつと大變だらうと、夫を思ひ、子を思ふ、多くの妻や母の

事を、おもひやることも痛切となり、去年十月のはじめ、手許にゐた従弟の出征以來、實を云へば、安定が心になく、ボーツとして、生活の習慣が鈍くなつて了つてゐた。

これではいけないと、ハッキリおもふのだが、張りを失ひ、何をしても、ピンと行かない、まるで、崖に落ちた人が、上に、はひ上らうとするやうに、私は、心配の中での暮し方を考へたのである。

こんな状態であつた私に、ある日、黒澤のハガキが來た。見ると、思ひもかけない、まつたく思ひもかけない友人の死であつた。その人は、文名を若杉島子といひ、美しい人で、女流作家といふよりも、「美しいマダム」

として、文學者間に、評價されて來たのだつた。私とはほとんど、二十五年來の親友であつた。この一二年、會であふ位、氣安さから、あふ事もなかつたが、病氣だつたといふ事も聞いてなかつたので、私は、驚愕してゐた。

「アイトウハテナシ」

とすぐ電報を打つてから、夕方、省線につて、その不幸の家へ行くみちみち、明日知れぬ命と次々に遺書をおくつて來る軍人よりも、早く鬼籍に入り、幽明境を異にした人々をこの東京に見出して、了ひ、古風云へば、無常の嵐——それを新しく體驗する思ひで一杯だつた。

焼香をすましたあとで、家の人から話をきくと、病氣といふほどではなく、一寸風邪氣味だつたので、醫者から、熱さましをもらひそれをのんで二十分ほどたち、吐氣がして、湯殿へ吐きに行つたところ、顔頭して、眉と眉との間、鼻の上を打ち、即死したといふのである。しかも検視の結果、この急激の死は

打撲からではなく、それによる衝激からの心臓麻痺だといふ事がわかつた。

旦那様は、その妻の死の三十分まへ、妻にすすめられて、パアルバックの「大地」の映画を附近の活動館へ、客とともに見に行つてゐたので、無論、臨終の間にあはなかつた。

いろいろ、話をきいて見ると、明日知れぬ命どころではない、三十分さきも知れなかつたといふ、てきびしい悲事なだつた。

死者の夫、子供、親戚、友人、何れも、お葬式の日には、すすり上げて泣いた。私もこれまで、知人、友人の、いくつかのお葬式を見て來たが、このお葬式位、みんなが、涙を流したのを見た事がない。

一寸さきのわからぬ、はかない人の命、遠方、近所も、あつたもんぢやない……みんなこんなものだ……

この友人の突然の死が、私のためには、善智識となり、それ以來、鈍くなつてゐた私の生活の軋りが、幾分活潑になりかかつた。

今年になつてからののはじめての音信、いや

遺書が、北滿からおくられたので、ひらくと「夜半に嵐の吹かぬものかは」の文句が又入つてゐる。解任になつて、東京に歸れば、又机にむかつて、就職の履歴書を書く身でせうが、その必要もないかも知れませんが、結んである。佳木斯郊外で、騎馬の団にあひ、一行四人、雪の中にて、伏せの姿勢をとり、眼を光らして進んだが、その壯絶の光景を見せたかつたともあり、一緒に來た職友中、すでに十二人は死んだとも書いてあるのだ。死なれた少尉殿のお顔がちらつくともある。

私はこの報告の手紙の封筒に、墨くろろんと「南無阿彌陀佛」と萬事御佛にまかせまつる文字を書いた。

それあしたにひらくる榮花は、
ゆふべの風にちりやすく
ゆふべにむすぶ命露は、
あしたの日にきえやすし

——法然上人法語抄・六——



童 話

日^ひの丸^{まる}の旗^{はた}

菊^{きく} 地^ち 謙^{かへ} 雄^を
野^の 水^{みづ} 昌^{あき} 子^こ 畫^え

メエーン、メエーンと羊が廣い野原に二匹
三匹草を求めてさまようてゐます。

羊の首には鈴がつけてあると見えて、
チリンく、メエーン、とのどかな北支那
の奥地の山にコダマして、ほんとに平和です。
陽少年は草の上に両手を伸して仰向けに寝
そべつて澄み渡つた青空に胸一杯の呼吸をす
ると、

マーチ。が行きます

あかしやの街を

カラーンコン カラーンコン

マーチ。の鐘です なつてます

(林利徳詩ノ一節)

のんびりと口ずさんでゐます。
峠を越えて町へ行く支那馬車の鐘の音がカ
ラーンコンと尾を長く引いて通つて行きまし
た。

やがて日も西の山に傾いて、町へ向つた馬
車が悠長な鐘の音をひやかせて、赤い姿を向
うの峠に現はす頃、陽ちゃんは「ボー」と角
笛を吹く、羊達はあちらからもこちらからも

チリン チリン メエーン

チリン チリン メエーン

と集つて来る。

マーチ。が行きます

星 ふる 夜を

カラーン コン カラーン コン
カンテラ ゆら／＼ ゆれてます

陽ちゃんのと共に、羊達はぞろ／＼ぞろ
ぞろ家に歸つて行く。

これからお父さんとたつた二人ですが
楽しい夕餉が始るのです。

或る日、陽ちゃんが羊を小屋に入れて
お父さんと夕御飯を頂いてゐますと、突
然、大勢の人の叫び聲と、鐵砲の音が

ドン／＼ ドドドドン!!

とひつきりなしに聞えはじめた。

「おや、お父さん 何でせう!!」

「ほんとに、何事だらう。どれ／＼、表
を開けて見よう」

恐る／＼、表の戸を開けて見ると驚い
た。家の前の五〇〇米ばかり離れた向
う山から、機關銃や小銃が火を吹いて打
出されてゐる。

「ア!! 大變だ」

急いで裏の戸を開けて見ると、さつき迄、
馬車が、朗かに通つてゐた峠からも、それに

應へるやうに、ドドドドン!! と打出して
ゐる。

「サア、大變だ、陽ちゃん戸をしつかり締め

しばらくすると鐵砲の音も、機關銃の響き
も静まつた。

「ア、よかつた」二人がホッと胸を撫で降
した時、表の戸をドン／＼ドン／＼と強
くた／＼、

「誰か来たやうね、お父さん」

陽ちゃんが戸のすきからのぞいて見ま
すと、ひげのぼう／＼と伸びた背の高い
兵隊さんが、恐ろしい青龍刀を片手にさ
げて立つてゐます。

「こら!! 開けぬか。開けないと戸をた
たきこはすぞ」

「ハイ／＼今あけます。一寸お待ち下さ
い」

仕方がない戸を開けますと、陽ちゃん
をおしのけて中へは入つて来た兵隊さ
ん、ギラ／＼光る眼のおそろしいこと、

「オイ、お前の家には羊が飼つてあるな、

あれをこゝへ連れて来い」

「ハイ、兵隊さん、家には羊が飼つてありま
すが、羊を賣るのが商賣なんですから、買つ



なさい。そしてこつちへ来るんだ」

二人は小さくかたまつて、部屋の隅に抱き

あつてゐました。

て下さい」

「なに、買つて呉れ、おれ達は支那の兵隊だぞ。今日日本と戦争をしてゐるんだ。お國の大事に買つて呉れとは何事だ。羊なんかどんなに蹴上するんだ」

「だつて……」

「なにが『だつて……』だ。グズ／＼云ふと爲にならぬぞ、お前には此の青龍刀が見えないか」

と、青龍刀の柄に手をかけて恐い眼でにらみつけるんです。

陽ちゃんは仕方がない。羊を一匹連れて來ました。

「何だ一匹ばかり、三四いるんだ。連れて來い」

三四の羊を連れて「また來るぞ」と歸つて行く。後姿をちいつと眺めた陽ちゃん、

「ア、ア、なんていやな兵隊さんだらう。おどかして奪つて行くなんて、まるで馬賊見たやうだ」

うらめしさうに腕組をしていつまでも立つ

てゐました。

然し、次の晩も、その次の晩も、支那の兵隊は青龍刀の柄をたゞいては羊を奪つて行きしました。

「お父さん、こんなに毎日羊をとられてはやりきれない。もつと山奥へ引越し、しませうよ」

「さうだね、支那の兵隊はなぜ味方の國民のものを奪つて行くんだらう。まるで馬賊だ。明日は早く引越ししよう」

そんな相談の最中又表の戸をドン／＼ドンとたたゝく、

「おや？ 又來たよ」

「今晚は、今晚は、おやすみですか。お宅には羊が飼つてありますね」

「お父さん、又羊だとさ。こまつたな」

「羊を賣つて頂きたいと思つて來たんですよ」

「なに、羊を買つて下さる。ハイ／＼起きて居りますよ、今あけます。ハイ／＼」

お父さんは表の戸をガラ／＼と開けた。

鐵砲をかついだ、キリツトした服裝の兵隊

さん、

「や、今晚は羊を二三四譲つて頂きたいんだが」

「おや左様で、ありがとうございます。陽ちゃん羊を三四ばかり連れて來ておくれ。なるべく丸々肥えた奴をね」

「やあ、日本の兵隊さんだ。すぐもつて來ますよ」

陽ちゃんはいそ／＼と裏へ出て行つた。い兵隊さんだ、お錢を拂つてちゃんと買つて下さるんだもの。

「兵隊さん、とびきり上等を連れて來ましたよ」

「うん、ありがたう／＼。いゝ羊だ。さあお錢だ」。

「どうもすみません。いゝな日本の兵隊さん僕大すきだ」

「いや、どうも可愛い坊やだ。僕にも君位の子供がお國に待つてゐる。さうだ。ねえ坊や日本の子供が毎日歌ふ、いゝ歌を君に教へて

やらう」。

白地に赤く

日の丸 そめて

あゝ美しい日本の旗は

繰返して歌ふ兵隊さんの頭には、お國に待つてゐる坊やの顔が浮んで來た事でせう。

陽ちゃんも一生懸命、目を丸くして此の歌を眞似ました。しばらくすると、

「兵隊さん、覺えたよ、

白地に赤く

日の丸 そめて

あゝ美しい日本の旗は」

「さうだ。うまい／＼。ぢやまた來るよ」

歸つて行く日本の兵隊さんの後姿を、

ぢいつと眺めて、

「いゝ兵隊さんだな、親切だな」

いつまでも／＼立ち續ける陽ちゃんです。

した。

ところが翌朝です。突然、支那の兵隊が荒

荒しくとびこんで來て、

「おい、おやぢ、お前は支那の秘密を日本へ賣つたな。賣國奴」

と泣いてすがる陽ちゃんをつきとばして、

剣をつきつけて、近寄れば射し殺されさうです。

「兵隊さん!! お父さんはそんな悪い人ぢや

ありません。ゆるして下さい。ねえ兵隊

さん」

すがりつく陽ちゃんを門衛の兵隊さん

は

「うるさい!!」と、

大きな手で頬を打ちました。

可愛さうに陽ちゃんは、うらめしさう

に兵營をにらみつけ、泣く／＼家に歸り

ましたが、ドツカリと坐ると手をくんで

考へました。

「さうだ、いゝ事がある」

大きな白い四角な布を取り出すと赤い

繪具で眞中に丸を染め出しました。

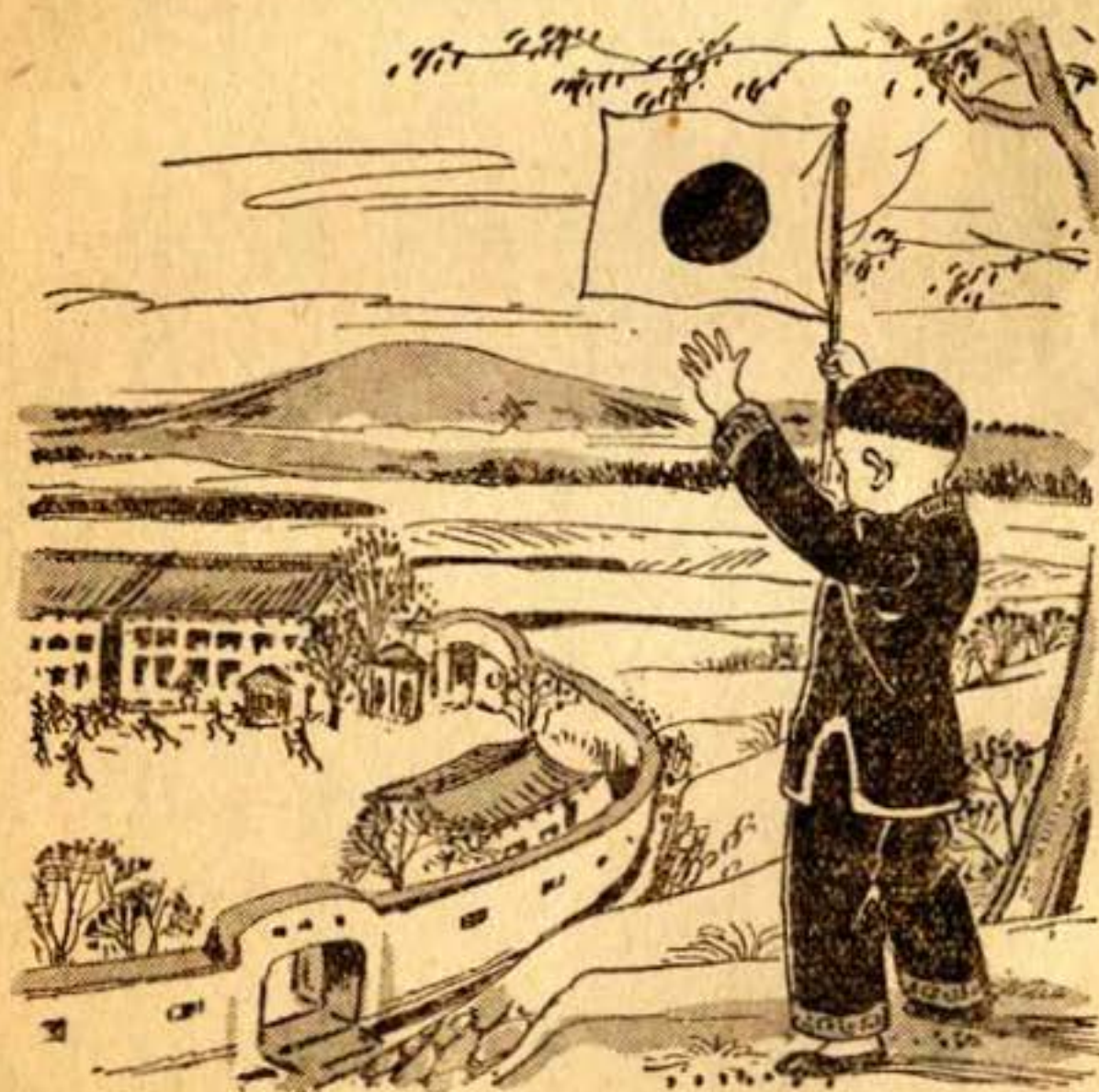
「おゝ、日本の旗が出來た。これでよし」

これを長い竹の先きに、ゆはえつける

と夜にまぎれて、支那の兵營の裏山に登りま

した。そして一番頂上の木の上に結びつけま

した。ニツコリ笑つた陽ちゃんは、



「今に面白い事が起るぞ。人々の幸福のために戦ふ日本の兵隊さんに加勢するのは人間の正しい行ひだ」

やがて夜が白々と明け、朝日が山の頂上をキラ／＼照し始めた。陽ちやんの掲げた日の御旗もクツキリと浮び出されました。丁度日本國威が四方に輝く如く、此の重なる山々を力強く征服してゐるやうです。

山下の兵營に多勢をたのんで安心してゐた支那兵がこれを見た時の驚きはどんなだつたでせう。

變つた漁法

諏訪湖では湖面に氷がはると「屋敷」と云ふ面白い漁を始めます。それは氷面を二坪程の大きさにブチ破り、拳大の石を澤山沈めて湖底に石の山を作るのです。するとこれが魚の家になつて、光を求めて大小の獲物がウヨ／＼と集つて來ます。それを夜明け方にすくひ上げるのです。

又遠く向う山に攻撃の潮時を待つて居た日本兵隊さんがこれを見た時、その驚きと喜びはどんなでしたでせう。

支那軍は、それ日本兵が裏山を占領した。大へん／＼と退却を始めた。

日本軍は、それ裏山に友軍が表れた。今こそ突撃の時だ。進め／＼!! 猛虎の怒る如く潮の押しよせる如く、支那の兵營になだれ込みました。

然しそこには彈丸の雨もなく、白兵戦も見られず、どの部屋も、どの部屋もカラッポ、たゞ一番奥の部屋にグル／＼まきに、しばらくした。一人の老人が居ただけです。

「どうしたんだらう。不思議だなあ、山の上から友軍の砲撃もなし」

早速兵隊さんは山へ登つて行きました。山の上には日本の兵隊さんは居なくて旗の下に陽ちやんが萬歳を叫んでゐるだけです。

それから間もなく占領した支那の兵營で陽ちやんとお父さんが抱きあつて嬉し泣きに泣いてゐる姿が見られました。

「ねえ坊や、君の働きは金鵄勳章だぞ」

と、いつか羊を買ひに來た兵隊さんがニコ笑つて陽ちやんの肩をたゞきました。

「坊や、戦争がすんだら、澤山の御褒美を上げるよ。これがそのしるしだ」

と、隊長さんは陽ちやんに何か紙に書いたものを渡しました。

「さあ、君達は早く西の方の戦ひの治つた方へ行き給へ、羊は皆んな買上げてあげよう」

温かい日本の兵隊さんの言葉に二人はたゞ泣くだけです。やがて二人は、

「兵隊さん、色々ありがとうございました。ではお別れします。さやうなら／＼」

「坊や、氣を付けて行くんだぞ」

兵隊さん達は手を振つて見送つて下されました。陽ちやんは、お父さんの手を引いて、

白地に 赤く

日の丸 そめて
あゝ美しい 日本の旗は
大きな聲で歌つて行く。二人の顔にはほん
とに喜びの色が輝いてゐました。(終り)



孤獨に徹した詩人

放哉の句を語る

奥平 祥一

一、つくぐ淋しい
我が影よ動かして見る

放哉は明治四十二年帝大出の法學士であつた。本名を尾崎秀雄といひ、島根縣の人。

初め東洋生命に勤め、後朝鮮海上火災保險會社に轉じ朝鮮へ渡つた。

その後事情あつて朝鮮海上火災をやめ、一旗擧げんものと滿洲へ渡つた。ところがこゝでも亦まんまと失敗を喫し、その上惡

質の肋膜炎に罹され、夫妻相携へて故國の土を踏んだ。

その時彼は、——萬事ヲ抛ツテ、小生ハ無一文トナリタレバ、一燈園ノざんげ生活ニ入り、過去ノ罪ホロボシ、並ニ社會奉仕ノ勞働ニ従事シテ借金セシ友人、其他知己ニ報恩スルタメ、自分ノ肉體ヲムチ打ツ事ニキメ、妻ハ抛レ（郷里ニ歸ラヌト云フ故）獨立ノ生計ニ入ル事ニキメタル也。——放哉は、無一物の體を京都鹿ヶ谷の一燈園へ運んで行つた。時に大正十二年秋十一月であつた。

放哉は、自分の前身をひたかくしにかくしながら、園の同行等と同じやうに、黒のヒツパリに瘦せた體を包み、諸々方々托鉢して歩いた。

山水ちろろ茶碗眞白く洗ひ去る

ホツリホツリ闇に浸りて歸り來る人々

落葉掃き居る人の後ろの往來を知らず

つくづく淋しい我が影よ動かして見る

ねそべつて書いて居る手紙を鶏に覗かれる

月夜戻り来て長い手紙を書き出す

これらの句は、放哉の一體圓時代の句である。じつと味つてみると、心の底から淋しさのこみ上げて来るやうな句。『つくづく淋しい我が影よ動かして見る』誰かかういふ刹那を味はゝない者があるだらうか。放哉はその後わづか三年ばかり後（大正五年四月）短い生涯を終つた。彼は、残された短かい命のともいひをふりかざしながら、たゞ一筋に人間鍛錬の道をぐん／＼つき進んで行つた。彼の句は、彼が私達に残してくれた淋しき人生の足跡である。

二、人をそしる心を

すて豆の皮むく

大正十四年六月初めのある日、放哉は播州須磨寺の大師堂の堂守として住込んだ。

放哉は、そこで蠟燭を立てたり、鉦を叩いたり、庭掃除をしたり、時には、『寶物拜觀は五錢で出来マース』、『拜觀は只今おつれがありまーす』などと怒鳴りもしながら暮した。しかし放哉の心境はいよく／＼ますます高まつて行くばかりであつた。彼の心の眼は、古への禪僧の如く澄んで行くばかりであつた。放哉はこのころ、『佛三昧も座禪の一種であります』と固く信ずるやうになり、『俳句は結局は、只「ダマツテ居ル」のが俳句かもしれんと思はれる時もあります。』『此の間の朝、疊の上を一疋の蟬が這つて来るのです、穴に這入つて了ふのも間もあるまい、殺すのは悲しいのです。ソレで蟬の歩く道をよけてやりました、けものが歩

く道をよける朝の疊』といふのが出来たといふわけ、此の氣持より外には修業の道はあるまいと思はれます。』

放哉は念佛も題目も唱へなかつた、座禪もしなかつた。（學生時代には鎌倉圓覺寺へ行つて釋宗演師に就いて、座禪をしたといふ）しかし彼の修行の結果は、それと同じであつた。放哉がわが肉體を鞭打ち、孤獨と無一物に徹しきることによつて、次第に自己の心境を高めて行つた。

放哉にとつて、俳句は直ちに南無阿彌陀佛であつた。句三昧の境地に入ることは、直ちに涅槃寂靜の境地に入るも同じであつた。

須磨寺へ入るとともに放哉の句はぐんと光りを増した。

あすは雨らしい青葉の中のお堂を閉める

一日物云はず蝶の影さす

友を送りて雨風に追はれてもどる

雨の日は御燈ともし一人居る

なぎさふりかへる我が足跡も無く

井戸の暗さにわが顔を見出す

沈黙の池に龜一つ浮き上る

鐘ついて去る鐘の餘韻の中

佛飯ほの白く蚊がなき寄るばかり

たつた一人になりきつて夕空

高浪打ちかへす砂濱に一人を投げ出す

げつそり搜せて竹の葉をはらつてゐる

月の出おそくなり松の木桶の木

これらの句を、じつと味つて貰ひたいと

思ふ、放哉の句は、説明の外に置かれる。

魂から魂に、しみじみとさゝやかける

不思議な言葉の魔術である。私達は、彼の

句の中に、ふとした刹那の自分の心の相

を見付け出す、そして、ハッとわれに還る。

たゞそれだけでよいのである。とはいふも

の、「井戸の暗さにわが顔を見出す」とい

はれて、ハッと驚かないものがあるだらう

か。私達は常に自分の顔を忘れてゐる。他人の顔にのみ注意を向ける。ところが、何か、ふとした機會に、わが顔を見出す、思はずギョツとする。さういふ體驗を持たぬものがあるだらうか。私は法然上人の次の法語を思ひ出すのである。——それあしたにひらくる榮花は、ゆふべの風にちりやすく、ゆふべにむすぶ命露は、あしたの日にきえやすし。是をしらずしてつねにさかえんこ

とを思ひ、是をさとらずしてつねにあらん

ことをおもふ。しかるあひだ、無常の風ひ

とたびふきて、有爲のつゆながくきえぬれ

ば、これを曠野にすて、これをとをき山に

おくる。かばねはつひにこけのしたにうづ

もれ、たましひはひとりたびのそらにまよ

ふ。妻子眷屬は、家にあれどもともなはず、

七寶萬寶は藏にみてれども益もなし。たゞ

身にしたがふものは後悔のなみだ也。』

何も忘れた氣で夏帽かぶつて

兩手に清水をさげてくらゐ路を通る

潮満ちきつてなくはひぐらし

乞食の兒が銀杏の實を袋からなんでも出す

海のあけくれなんにもない部屋

銅錢ばかりかぞへて夕べ事足りて居る

夕べひよいと出た一本足の雀よ

人をそしる心をすて豆の皮むく

庭石一つすゑられて夕暮が来る

夕べ落葉たいて居る赤い舌出す

自らをのしり盡さずあふむけに寝る

何か求むる心海へ放つ

大空のました帽子かぶらず

佛體にほられて石ありけり

心をまとめる鉛筆をとがらす

こんなよい月を一人で見て寝る

これらの句を一句づゝ味つてみると、それが不氣味ないきものであるかのやうな氣持がして来る。譬へば、『何か求むる心海へ放つ』は、それが正しくある日の私自身ではなかつたか。私は自分の正體を、見出してハツとおどろく。『佛體ほられて石ありけり』——正しくそこに佛體がほられた石が寂然として立つてゐるではないか。——『石ありけり』——さみしいほどの實在觀、憐みぬき、苦しみぬいた揚句、『佛はゐます』とはつきりいはずにゐられない私達のつきつめた氣持がいひあらはされてゐる。

三、いれものがない兩手でうける

放哉はその晩年を讃岐國小豆島土庄町西光寺奥ノ院南郷庵で送つた。私は曾つてはる／＼小豆島に彼の墓を弔つたことがある。彼が生前愛でたといふ庭前の松の大樹

の下に、

いれものがない兩手でうける
といふ句を刻んだ記念碑が立つてゐた。

放哉の墓は、南郷庵裏山の小高い墓地の一角、東を向いて、彼が好きで／＼たまらなかつたしづかな内海の一部を眺めながら、寂然として佇んでゐた。私は、放哉が生前さん／＼甘え通した西光寺の院主杉本玄々子さんから、ありし日の放哉のことなど、こま／＼と話して聞かせていた。今、私の心のなかには南郷庵時代の放哉の句があざやかによみがへる。

海が少し見える小さい窓一つもつ

海へ向つて開いた南郷庵の窓——そこから私も友と一緒に、六月の陽に輝きながら『少し見える』海を眺めた。そして窓のす

ぐ外には、

大松一本雀に興へ庵がある

と詠んだその『大松』が、その日も亦颯の響きを奏でてゐた。

放哉の句は、南郷庵に入ると共に、一段の輝きを増した。ちやうど正に燃え盡きんとする蠟燭の灯の如くに。——次に南郷庵時代の數句を掲げ、讀む人の味ふに任せた

わが顔があつた小さい鏡買うてもどる

とんぼが淋しい机にとまりに來てくれた

松かさも火にして豆が煮えた

疊を歩く雀の足音知つて居る

風にふかれ信心申して居る

淋しい寝る本がない

お粥煮えてくる音の鍋ふた

爪切つたゆびが十本ある

障子の穴から覗いて見ても留守である

咳をしても一人

嵐が落ちた夜の白湯を呑んでゐる

とつぷり暮れて足を洗つて居る

あすは元日が来る佛とわたくし

掛取も來てくれぬ大晦日も獨り

窓あけた笑ひ顔だ

風吹く道のめくら

旅人夫婦で相談してゐる

窓まで這つて來た顔出して青草

障子に近く蘆枯るる風音

肉がやせて来る太い骨である

一つの湯呑を置いてむせてゐる

やせたからだを窓に置き船の汽笛

すっかり病人になつて柳の糸が吹かれる

○

○

○

○

名人
逸話

圓朝と鐵舟

三宅連

明治初年、三遊亭圓朝と云ふ落語の名人があつた。「鹽原多助」、「怪談牡丹燈籠」等を創作して、すばらしい好評を博したが、その圓朝が、或日、山岡鐵舟の家を訪ねた。

鐵舟は名高い劍客で、且、禪味の溢れた高潔なる人格者である。その人格を慕つて訪問したわけであるが、第一回はあたり障りのない世間話をしていとまを告げ、第二回目の訪問の時、

「先般はつまらぬ話を申し上げましたが、今日は、何か面白い落語を御話し致しませう。どんな話が御好きですか。」と、圓朝が、少し得意になつて言がた。

勿論、座興の積りでさう言つたのだが、その頃評判の圓朝として、自分の話には、誰で

も夢中にさせ得るといふ、自信たつぷりの表情が、彼の顔に現はれてゐた。

「それは有り難い。」鐵舟はチラと圓朝の顔を眺めたが、「では一つ、桃太郎の話をして貰はうかね。」と、何喰はぬ顔で言つてのけた。

「エッ! 桃太郎?」圓朝は思はず叫んだ。意外な注文に、あつけにとられたのである。

と同時に、急所を突かれた感じがした。日本に昔から傳はつてゐる民話、誰でも知つてゐる「桃太郎」の話を、三歳の童兒ならいざ知らず、鐵舟のやうな非凡人に、どうして面白く話す事が出来得よう? それに、入口に贈炙されてゐる話だけに、その荒筋は知つてゐるが、話の微細なる點に至つては、圓朝と雖も知らなかつたのである。

(これは、おれを困らせるためだな。)圓朝は思つた。

しかし、「桃太郎」の話は出来ませぬとも言へないので、そこは圓朝、

「それは、誰でも知つてゐる話です。面白くもをかしくありません。ほかに、何か面白い話をいたしませう。」と、たくみに、言ひ逃れようとした。

すると鐵舟は、にこ／＼笑ひながら、

「いや、わしは子供の頃、母上から、桃太郎の話の幾度となく聞いた。そして、非常に面白かつた。母上は話下手だつたが、それでも自分には面白かつた。それを、話の名人の君に聞いたら、どんなに面白いだらうと思ふのだ。遠慮せずに、話して聞かせてくれ。」と、頭を乞うた。

流石の圓朝も、これには參つた。顔を赤くして、生唾を呑み込み／＼してゐたが、たうとう、

「私には、桃太郎の話は出来ませぬ。」とあやまつて、放々の體で辭し去つた。

負けず嫌ひの圓朝は、この事を非常にくやしがつた。自宅へ歸る途中も、何とかして恥を雪ぎたいものだ、頻りに首をひねつた。

さうして、數日間、暇ある毎に「桃太郎」の話の工夫を凝らし、漸く新作を物することが出来た。

（よし、今度こそ、無理にも桃太郎の話をして、前回の恥を雪ぎたいものだ。）

圓朝は考へて、機會の到來を待つてゐた。

すると、淺草の海蔵寺に法會が営まれ、圓朝は之に赴いたが、そこで、バツタリ鐵舟に會つた。彼は踊り上つて鐵舟に近づき、

「過日は桃太郎の話を御所望になりましたが、準備がなかつたものですからつい失禮致しました。今日は、それを御話し申し度いと思ひます。」

言葉は丁寧だが、圓朝の心底には、



負けじ魂の針が落んでゐた。ところが鐵舟は「ハハハ」と笑つて、

「あの時は大變聞きたく思つたが、今日は、桃太郎の話聞く氣にならぬ。折角だがおことわりする。」と、洒々として言つた。

圓朝のはりつめた心は急にガツクリした。彼は、平然とした鐵舟の體を呆然と見つめながら、到底自分は彼の足下にも寄り附き得ぬ人物であることをしみじみと感じねばならなかつた。

圓朝は益々、鐵舟の人格を慕つた。

それから數日経つた時であつた。

「君は寄席の高座に上つてゐて、客の中に、欠伸をしたり途中で歸つたりする者があつたら、氣にかゝるか。」鐵舟が圓朝に訊いた。

神經質な圓朝は、客の態度を非常に氣にした。高座の上から、耳語を交してゐる客を發見したりすると、思はずカツとなつて、「馬鹿野郎!!」と怒鳴り

つけたい衝動にかられる事が屢々あつた。

「氣にかゝります。」

「それが氣になるやうでは、君はまだ上手とは言ひ難い。これを無法にたとへて見るに、客は敵である、欠伸をしたり中座したりするのは、その敵が斬り込んで來たのだ。こんな時には、立ち向ふよりも身をかはして避けるのが肝心だ。ここの處を會得してこそ、藝人でも劍客でも、名人上手と言ひ得るのだ。」

圓朝は此の教を有り難く思つた。

圓朝が鐵舟を初めて訪うてから三年目、明治十三年九月廿四日、鐵舟の友人千葉立造の家で、新居披露の宴が張られた。鐵舟を初めとして、京都嵯峨天龍寺の滴水和尚、幕府槍術の師範役であつた高橋泥舟等が招かれ、圓朝もその席に列した。

宴の半に、鐵舟は、「圓朝君は、あまたある落語家の中でも名人だから、舌を動かさず口を結んで噺が出来るだらう。一つやつて見てくれないか。」と生真面目な顔で圓朝に言つた。圓朝はまたもや此の難問に、呆然としたが

どうしてそんな事が出来得ようか。

「出来ません。」と、小さい聲で、答へるより

他仕方がなかつた。

すると鐵舟は、同席の人々を顧て、

「こんなことが出来ぬやうでは、圓朝は大下手だ。藝は前座にも劣つてゐる。これを考へてこそ圓朝の價値はあるので、然らざれば仕方のない人物だ。」

満座の中で、こんな風に言ひ放たれた圓朝は、蒼くなつて疊を見つめた。自分の修養の到らないのは別として、歴々の前で、こんな罵らなくてもいいではないか。——と思つて、鐵舟に對する憤りさへ感じた。彼のかたく握りしめた拳は、かすかに慄へてゐた。

鐵舟はつと立ち上つて階段のところへ行きそこから圓朝を呼んだ。

彼は階段を降りて、長い廊下をサツサと歩いて行つた。圓朝は糸でも手繰り寄せられるやうに、彼の背後に無意識に従つた。

やがて、薄暗い座敷には入つた。そこは此の家の主人立造の居室らしく、大きな熊の皮

が敷いてあつた。

鐵舟はその皮の上にビタリと坐ると、おもむろに口を開いた。

「圓朝ともいはれる君に、『無舌』の意味が分

らぬことはあるまい。さあ、こゝで先に言つた舌を動かさず口を結んで話をして見給へ。」

圓朝は「よし。」と心の中で叫んで、一生懸命に「無舌」の眞意を探らうとした。彼の廣い額には苦悶の皺が刻まれ、やがて油汗が浮かんだ。鐵舟はその様をじつと眺めてゐた。

庭にはうらゝかな秋の陽ざしを浴びて、チ、と色鳥がさへずつてゐたが、圓朝の耳には入り得べくもなかつた。

二時間ばかり——。「以心傳心」といふ言葉が、稻妻のやうに、圓朝の腦裡にひらめいた。豁然として彼は悟つた。

「以心傳心」——あらゆる藝の極致はこゝに到達せねばならなかつた。百萬言の饒舌も、これなくして何するものぞ!!

この時を境として、圓朝の藝はますます光彩を加へた。

漫畫

新春三題

(その一) 隣りの梅

『いよう、これが自慢の梅ですな。たいした
ものですな』

『いや違いますよ、この鉢の梅ですよ』



比羅夫

(その二) トーチカ細君

夜遅く呑んで帰宅した夫、それでも
忘れず買つて歸つた坊やの玩具で武
装して
『さて、どうして攻略しようかな?』



比羅夫

(その三)

優勝力士故郷に
歸るの圖



比羅夫



筆・隨・仰・信

教育は食堂から

『坊やお夕飯だよ！』
子供が喜ぶ。
御馳走だつ！
お腹が減つてゐる。
周章てお箸を握る。
『一寸お待ち！』
『……』
『さつき何をしたのつ？』
『……』
『悪戯をしたねつ？』
『……』
『お断りを云ひなさいつ！』

食 堂 教 育

『……』
『云はなきや食べさせないぞつ！』
『ワッ！』
『云ひなさいつ！』
『わつ、わるかつた！』
やつと御飯が食べられる。
一遍泣かさなければ食べさせぬ親がある。
主人の盃や箸箱の飛ぶのも食堂だ。
妻が夫を睨み返すのも食堂だ。
ともすれば食堂が地獄になる。
怒つて食べては血にならぬ。
泣いて食べては身にならぬ。
唾液が出ないからだ。

森 脇 孝 之

胃液が出ないからだ。
害ふのは體だけではない。
悦び度くても、悦べない。
剛き度くても、剛けない。
食堂さへ靈化されたら、體も出来る。
心も出来る。

何でも食べよう！

金持の子供に限つて弱蟲が多い。
一人つ子に限つて弱蟲が多い。
總領に限つて弱蟲が多い。
可愛がり過ぎるからだ。
食べ方が我儘だからだ。
そんな子供に限つて意志が弱い。

頭張がない。

田舎のお百姓は、榮養學は知らない。

菜葉か、大根か、味噌汁だ。

でも顔色が好い。

意志が強い。

頭張が利く。

一粒でも限りなき御佛のおめぐみだ。

何でも食べよう！

綺麗に食べよう！

或工場の食卓の上にアルミの壺がある。

それに骨や、食滓を入れるのだ。

或時、鰯の煮附がお皿にあつた。

誰も骨を壺に入れる者がない。

凝土の地べたに皆投げ附けるのだ。

鰯の骨の分列式だ。

三千本の分列式だ。

何と云ふ汚いことだらう！

何と云ふ不衛生なことだらう！

一事が萬事だ。

骨ばかりではないのだ。

一寸のことで綺麗になるのだ。

お化粧は食堂からだ。

綺麗に食べて、花でも入れよう！

ゆつくり食べよう！

七十遍嚼んで食べたなら好いと云ふ。

とても出来さうにない。

三十五六遍で好いと云ふ。

それも出来さうにない。

まあ出来るだけゆつくり食べよう！

ゆつくり食べると唾液が出るのだ。

それが消化の良劑なのだ。

唾液が出れば味も出る。

ゆつくり食べれば頭も軽い。

拜んで食べよう！

お佛壇の佛様を拜む者はある。

だが、仲々御飯が拜めないのだ。

自分の力で食べてゐると思ふからだ。

不遜なことだ。

不信心なことだ。

昔の人は拜んで食べた。

佛様のお蔭だからだ。

諸の人々の汗と脂のお蔭だからだ。

拜んで食べれば、何でも美味い。

綺麗に食べる。ゆつくり食べる。

小言が出ない。

心の靈化は食堂からだ！

『南無阿彌陀佛とかみて、南無阿彌陀佛とのみ入るべきなり。』

これは法然上人の御法語だ。(了)

智者の念佛と愚者の念佛

問ていはく、智者の念佛と愚者の念佛といづれも差別なしや。答へていはく、ほとけの本願にとづかば、すこしの差別もなし。そのゆへは、阿彌陀佛ほとけになり給はざりしむかし、十方の衆生わが名をとへば、乃至十聲までもむかへんと、ちかひをたて給ひけるは、智者をえらび、愚者をすてんにはあらず。

信 仰 相 談

…中村辨康師擔當…

(本欄への質問はヘガキに住所氏名御明記の上信仰相談係宛のこと、誌上匿名は可)

亡き人への供養

(問)

浄土に依りまして、色
色お教へを頂いて居

たへ下さいませ。

るものであります。今年(昭和
十二年)四月親しくして居りま

(答)

(群馬 二十六歳和)
淋しいけれど優しい御
心の内を御察ししま

した方がなくなりました。その
方は佛とも法とも存じません
したので、何とかしてこの方を
慰め供養を致したいと存じま

すと、何だか私も身につまされ
て来るやうです。然し幸にも
それが動機になつて、宗教に心
を向けられた事はまた、非常に
嬉しいことと存じます。

す。この方の死に依つて、幸ひ
に宗教に心を向ける様になり
ましたので、私に取りましては
善知識です。私は生きて行く望
みと、前途の光明を失つたや
うな淋しきで仕事も手につきま

とは、こまやかな人情の然らし
むるところです。出来るだけの
事をしてお上げなさい。それが
また貴女への慰めにもなります
し、貴女の宗教感情も一層豊か
になりませう。そして其方法と
しては、心から亡き御霊へ仕へ

られる氣持でなされたらよろし
いと存じます。香華を手向けお
經を上げるのもよいでせうし、
季節々々の果物など上げること
などもよいでせう。

然し一番よい事は貴女御自身
の信仰を深める事です。一心に
お念佛して、貴女御自身の心が
如來様に育てられて行くやう念

中でも知れませんし、お念佛
の中に感じて来るかも知れませ
ん。然し何う云ふ形で感ぜられ
るかは如來様へおまかせして、
貴女御自身は御信仰を深められ
ることのみに努められたらよい
と存じます。

じて行かれますと、何時か知ら
ず貴女の心に転度、光明がさし
て参ります。さうしたらそのな

昔し和泉式部でしたかは小式
部の内侍に先立たれて信仰に入
られたので我子は自分の知識で
あつたと云ふ述懐の歌を詠ま

つかしい方の喜ぶお顔も、ボツ
カリと闇の中に浮んで来ること
でせう。そしてニコニコし乍ら
貴女の信仰の濃やかさに話しか

にふりむけて信仰にいそしまる
とき「九族天に生ず」と云ふ言
葉もあるやうに、その亡き方も
成佛せられる事でせう。

けて呉れるでせう。それは夢の

地鎮祭と家相

(問)

私の地方では、家を建
てる前に縄張りをしま

よいとされて居ます。他所でも
こんな風習があるでせうか。ま
た建築前には神官を頼んでお

信 仰 相 談

祓ひをして貰ひます。佛教信者にもさう云ふことが必要でせうか。右御教示願ひます。

(答)

(熊本 五野一之)

家を建てる爲に地に惹きつけられた土地では理想的には行きませんから、其地に相に従つて、せめては保健の爲に間取りなどの最善を計るべく細張りをするのはよい事だと思ひます。

元來「家相」と云ふ事は保健の爲に出来て居ること、「方角」がいいとか悪いとか「いふこと」も、日當りがいいか悪いかが、即ち、太陽を中心として考ふべき事です。随て臺所とか便所とか家族の居間とかを各々保健的意味に於て第一に決定すべきですが、大概は客間を一番いい

所を選定して居るやうです。之は一番日當りの悪いところでもいいではありませんまいか。然るに「家相」を迷信的な災禍と結びつけたのは、人々のまだ教養の幼稚な時代に、健康上、宗教的な恐怖心を利用したものですから、その原始的なものが傳習され維持されて居るのに過ぎません。随て迷信が多いのです。と云つて衛生的効果も多分にありますから、あながちに否定することはいらぬお世話と云はるかも知れませんね。然し唯だ文化的に考へれば判ること「高い鑑定料」の五十圓も百圓も取られるなどは、少しどうかと思ひます。

また「地鎮の祭式」は佛教にもあります。無論密教的なものですが、神式よりも佛式の方が古いのではないかと思ひます。我國では現に平安朝の初期に佛堂建築の前に佛式の地鎮祭を行つて居ます。其式は陀羅尼集經とか其他二三の經典に出て居るもので、先づ繩を四方に引き次に對角線に引いて中央を求めるのが「繩張り」でそれが決まつてから輦舎を設けて五寶五藥五穀五香など埋めたりする複雑な式を行ふのださうです。彼岸にのみ限つて行ふかどうか其邊のことは知りませんが、今

は大概神式でやつて居る方が多いやうです。地鎮祭は相當全國的に行はれて居るらしいですが之は住居などに對する一種の清淨感、安意感が與へられることにもなるでせう。

然しもし之を行ふのに功利的な氣持であるならば本當の高い信仰的なものとは云はれないと思ひます。

三 重 の 念 佛

(問)

法然上人が鎮西上人に御話したと云ふ三重的念佛とは何う云ふ事ですか。(大阪 中野生)

(答)

専門的な御尋ねで此欄には適して居ないと存じますから、簡単に申し上げます。「三重の念佛」とは一には摩訶

止觀の念佛、二には往生要集の念佛、三には選擇本願の念佛で、一の摩訶止觀の念佛と云ふのは天台大師と云ふ天台宗の始祖があらはした「摩訶止觀」と云ふ書物の中に示された「念佛」ですが、止觀と云ふ坐禪觀法をやりたいけれど心が散つて成功が覺えないから、如來

信 仰 相 談

様の御加護に依て精神の統一を計りたいと思つて「南無阿彌陀佛」と聲を擧げて御願ひすることゝ云つたものです。

二の往生要集の念佛とは、恵心僧都と云ふ人が書かれた「往生要集」と云ふ本に出て居る念佛で、如來様の淨土に往生したいと思ふ念佛ではありませんが其念佛の意味が廣く「五念門」に亘つて、即ち「禮拜、讚歎、作願、觀察、回向」の、身體で禮拜すること、口で如來を讃めることも、心で往生を願ふことも、また或は佛身を觀念し、或は一切の行爲を極樂往生の方へ振り向けることも皆な悉く念佛であるとして、觀念も唱念も同じ効果はあるが、むしろ觀念の方は勝れて居る人の爲めの念佛であり、唱名の念佛は觀法の念佛の出來ない人の爲めのものであります。そ

して御自身でも自分は唱名組だとして深山念佛を唱へられましたが、如來への信仰と云ふよりもむしろ淨土往生の爲めの「手段」として念佛を見て居られたやうです。

第三の選擇本願の念佛とは法然上人の信仰體驗の上に見究められた念佛で、一切の宗教の中から彌陀といふ無量壽の佛の「願」を中心とする宗教を選びだし、其「願」の中から第十八の願こそ中心だと決定し、更に其第十八願に盛られた「念佛」は善導大師の「下至一聲十聲」の聲に發現する唱名念佛であると究め、そして一切の行爲を正雜の二に分け、其正の中から更に「正中の正」としての念佛を撰んだ「唯信」「單信」の純信仰を中心とする念佛なのです。即ち念佛は第二義的な手段ではなく「念佛」其ものの

中に目的が含まれて居ると見て居られるのです。元來「往生」と云ふことは如來の本願に願應しなければ出來ないのだから「如來の願に願する」純粹の信仰が最大要件です。然るに、「南無」し行く私達の信念は全く「本願に願する」氣持でなくては本物ではないから、信

經筒と經塚

(問)

第三卷の十一月號に埋經の文獻由來方法等に就て御尋ねしたのは、關白道長が書寫した經文を、經筒に入れて地中に埋めたと云ふその埋經の事です。再び御尋ね致します。(市内神田 池田靜)

(答)

失禮致しました。寫經を經筒の中に入れて地中に埋藏する事は經を守護して之を將來に保存する爲であり、

仰ある人の念佛の聲は其儘「本願に願する」心の流露であり、隨つて「修證一如」と道元の云つたやうに「手段」であるよりも「目的」が「聲」の中に實證されつゝある譯です。少しむづかしくなつて、誠に相済みませんでした。これ位で御勘辨願ひます。

且つそれを以て我家の幸福または祖先の菩提に供へる爲だとの事です。何時の頃から初まつたものか其起原は明らかでないけれども、支那で陳の南岳大師が金字の般若經法華經を造り之を五十六億七千萬年後の彌勒菩薩出現の世に傳へようとした故事から來たものだらうとの事です。南嶽思大師立誓願文と云ふのがそれです。我國に於てはか

信 仰 相 談

なり早くから行はれたらしく發掘せられたものに「天安元年三月二十三日」の銘のある尾張犬山瑞泉寺のもの、御知らせ下すつた寛弘四年八月御堂關白道長の大和金峰山に納めたもの、長元四年八月比叡山横川如法堂趾に埋めたもの（叡山要記卷下所載如法堂銅筒記）、康和五年の伯耆國舍人村倭文神社のもの、其他鎌倉時代、足利時代、徳川時代等かなり澤山發掘されたものがあるとの事で、それらに色々な様式があるさうです。

法然上人に歸依された關白兼實の日記「玉葉」には養和二年四月十六日の條下に「此日如法經寫功を終へ、最勝金剛院山に埋め奉る。先づ、書し終り奉れる後、余、願文並に名帳を書し筒に入れ奉り了ぬ。筒に入るゝ後、書手各封を付し其後闕分を補ふ。次に十種供

養導師に智詮阿闍梨なり。十種兩方に之を備け、其外に八燈を供養す。其後法性寺に渡し奉る。聖人四人の外假聖人等あり。御經を出し奉れる後、余、大將、僧都、車を同うして法性寺に向ふ。他道より參會するなり。御所の門内より歩行し奥の傍に埋め奉れる後、石を以て垣を築き、其上に石の五輪塔（法性寺座主梵字を書せらる）を立つ。其後御墓所に於て阿彌陀一卷を讀み了ぬ。御堂に歸參の後宅に歸る」とあります。大體の模様が判るやうです。尙ほ如法經の事は法然上人の「勅修御傳」を御覽下さい。三長記、明月記にも埋經のことが出て居るさうです。

また上に五輪塔など建てないで、土を盛り上げて塚を築いたものもあり之を經塚と呼んで居ります。經塚には經筒の外、經石、

經瓦など納めたものもありま
す。参考書は經筒沿革考、金石

御墓の起原と墓相

（問） 昨今墓相と云ふ事が盛んになり、年忌佛事の

時などによく其話が出ます。さ

う云ふ事があるでせうか。また

墓と云ふ物が印度、支那、日本

と段々傳つて來た様相など御解

答願度候。（愛知 奥平義照）

（問）

東京の〇〇先生と云ふ方はお墓の建て方や祀

り方に就て、家運の消長盛衰等

を研究せられ、我國唯一の墓相

の權威者のよし、其講演の速記

の印刷されたものを拜見しまし

たが、實際に墓相と云ふ事があ

るでせうか。

（答）

（桐生市 一念佛者）

一括して御答致しま
す。お墓に就ては第三

志、金石私志等で、委しい事は
考古學者でないとい分りません。

卷第六號（昭和十二年六月號）
の本欄「率都婆の意義」にお墓

の起原とそれが我國へ傳はつて
來てからの推移などを簡單では

ありました。が、お答へして置き
ましたから、それを御參照願ひ

ます。

つまりお墓とは率都婆のこと

で、それが「塔」ともなり「石

塔」即ちお墓ともなり「塔婆」

ともなつたのです。委しい事は

到底本欄では申し上げ切れませ

んから御許し願ひます。

次に墓相に就ての善惡は要す

るに「分相應」が一番よい事で
無論奇形變形のお墓とか身分不
相應なお墓とかはいけなないと存
じます。から云ふ意味での墓相

信 仰 相 談

は認めてもよいでせう。

私も墓相に關する印刷物を二冊ほど見た事がありました。承認の出来る點もあり、迷信に屬するところもありまして大したものではありませんでした。そんなものよりも常識で判断したらよいと思ひます。別に迷ふ必要はないでせう。基礎をコンクリートでやつてはいけないとか、一つにしてはいけないなどと云ふ事も書いてありましたが

そんな論は全く馬鹿氣で居ります。眞面目なものなら何んなのでもいい筈です。然し金ばかりなくとも綺麗にだけはして置きたいものです。よく昔がはえて文字の判明しないものもありますが、チャンと洗つて前の水鉢の水もボウフラのわかない程度にはして置きたいと思ひます。常に清淨にして置く事が一番肝要な事です。

往生の論

或る時、人々が集つて後世のことを話し合つてゐた折、魚を食べぬ者こそ往生をするのであると云ふものもあり、魚を食べる者こそ往生をする事が出来るのだ、なぞと議論をしてゐるのを、上人がお聞きになつて、魚を食べる者が往生をするなら鶴こそ

一番往生をするであらう、魚を食べぬ者が往生をするなら鶴こそ一番よい往生をするであらう。食ふにもよらず、食はぬにもよらず、たゞ念佛申するものが往生するのである。源空（法然上人御自身のこと）はさう思つてをると、仰せになつた。

（法語抄一三四）

沐浴すること

問

羅摩經に「世尊は尊者阿難を將ひ、拔提河に入りて浴し給ふ」とは如何なる事ですか。また身上相談も出来ますか。（大和 奥田藤作）

答

別に深い意味はありません。釋尊が御入滅になる前、拔提河で水浴をなさつたと云ふことで、水浴のことは色々の經典に出て居ります。元來印度は熱い國ですから水浴せずには居れなかつたのでせう。

またずつと古へから恒河は一番大きな神聖な河として婆羅門教などでも洗禮とかみそぎとか云ふやうな宗教的に意味づけた水浴法もあつた位です。佛教でも浴法に就て色々云つて居ますが水浴の外に溫浴香水浴もあつた

やうで効能を並べて居ます。即ち、一には四大安穩、二には風病を除き、三には濕痺を除き、四には寒氷を除き、五には熱氣を除き、六には垢穢を除き、七には身體輕便にして眼目精明なりなどと云つて居り、香水浴は此外に精氣充實し壽命を増益しに御願ひしてもよいですから。諸の勞乏を解き氣力を長養し人をして瞻勇ならしむなど大變褒めて居ります。また食後の入浴の害を説き食前の入浴に二益ありとして、衛生的にも考へて居るやうです。

次に「身上相談」のことは實は別に一つ欄を設けたいと云ふ話も編輯子の方から出た位です。すから、御遠慮なく申し入れて下さい。

俳壇

又四早動子



新宮 奥村 映水

評 北國を旅行せられた時の所産でもあらうか。相當の汽車旅行が感ぜられる。表現の調子の重いのも効果を感じて、大雪の重態を感じる。急行列車が雪の爲めに名もない驛に、そして雪の爲めに驛名も埋れて了つてゐる驛に臨時停車した時の如何にも心細い感懷であらう。

評 此の句は深い理想を詠つてゐるのでなく、凝つた表現にしようと思つたのでなく、只見たまゝ感じたまゝを平易に率直に言つてゐるのである。其の率直さを推賞したい。だが俳句を作る場合には、二つの大きな條件を忘れてはならない。一つは自分が、或る事柄に對して、どう見たかどう感じたかと云ふこと、もう一つは、其の感じた事柄を自分はどう表現したかと云ふことである。

郡山 安齋 四郎

評 此の句は深い理想を詠つてゐるのでなく、凝つた表現にしようと思つたのでなく、只見たまゝ感じたまゝを平易に率直に言つてゐるのである。其の率直さを推賞したい。だが俳句を作る場合には、二つの大きな條件を忘れてはならない。一つは自分が、或る事柄に對して、どう見たかどう感じたかと云ふこと、もう一つは、其の感じた事柄を自分はどう表現したかと云ふことである。

評 此の句は深い理想を詠つてゐるのでなく、凝つた表現にしようと思つたのでなく、只見たまゝ感じたまゝを平易に率直に言つてゐるのである。其の率直さを推賞したい。だが俳句を作る場合には、二つの大きな條件を忘れてはならない。一つは自分が、或る事柄に對して、どう見たかどう感じたかと云ふこと、もう一つは、其の感じた事柄を自分はどう表現したかと云ふことである。

いが、そして類句も有りさうであるが、それにもかゝらず、輕快な所のあるのを見逃せない。

名古屋 鷺津 耕順

評 拭きしより凍る廊下の薄あかり

評 雑巾がけをする下からすきに凍つて行く様子が見えるやうです。尋い體験からかも知れませんが非常な力強さが、上五、下五に現はれます。殊に下五は平凡なやうな表現ではあります。寒さが將々と迫るものがあります。

斯うした境地から「悟」が生れるのではないかと思はれます。

山口 長岡 見智

大なる芋のしたゝか足に落つ

東京 鈴木 白舟

夜々の星冷えゆき田道いそがるゝ

大和 奥田 藤作

秋風に芋蟲の吹かれ居たりけり

朝鮮 盤江 八年坊

寒雀いよく丸くまろまりて

青森 高松 秋水

擲け干す菊の香高し十夜寺

下關 中尾 頑次郎

枯枝に鳥もとまらず暮の秋

東京 三野 輪江雪

蜜柑山富士金色に暮れかゝる

同 新田 眞砂

池の面に低く垂れをり冬の霧

津久見 石堂 柑山生

聞きなれぬ訛もありて蜜柑摘み

大阪 農田 恭平

離臺のしぶきにふるゝ紅葉かな

大阪 吉廣 夏生

冬のぞの鐵材古りし工場かな

青森 高松 照瑞

除夜の鐘きこえてふかきねむりかな

京都 郡司 島誠也

森ふかき神苑の夜を初詣

十二月三日聖御廟御菓子拜受 盛敵の編みに候

北支那道軍乙集團 黒川 大道

真舞ひて影のゆたけき冬の山

愛媛 千葉 長作

雪よりも白き寒さや冬の月

越中 藤田 四三九

一筋の暗き流れや今朝の雪

京都 福島 孝治郎

歳の暮遺骨しばらく通りけり

大阪 日根野 谷三弘

冬來ればすなはち山の近くなり

横濱 塚本 秋月

雪の驛無言の勇士迎へけり

神奈川 篠野 湘南

短日の軒にかゝれるタオルかな

同 岡田 良田

新緑や櫛あれば柳枯れてあり

同 矢島 吟石

縋へば零餘子こぼるゝ垣根かな

同 植垣 まさも

枯芝をふみ渡る猫ふてゝし

東京 小菅 秋花

やはらかく霜夜をのぼる湯のけより

同 間宮 春生子

板塀を洗ひてゐたり冬うらゝ

同 稻野 邊露滴

ベートヴェン聴きて歳暮の街にゐる

同 石塚 十雨

霰氷のかゝりし金魚やゝ動く

同 芝 磨々

鋪道來る人多の日にしらけ見ゆ

大磯 豊田 てる女

若水の釣瓶の音は霞の中

東京 早山 青葉城

扉あいて暖房の人ふりかへる

同 河合 双魚

暮しよくなりたる友の賀狀かな

同 須田 曉鐘

さみどりの屋根よりとけて春の雪

同 関 歌泉

門松の奥をふかめし邸かな

大阪 千田 巖生

木風は郷愁と煤と運ぶもの

青森 七戸 木賊

笹の葉の音に驚く枯野かな

同 同

投稿規定

官製はがきに一冊二句以内
とし一冊十句以内
あて送ること

偉人の言葉に聞く

田中光顯伯

『困らぬ』主義

長州にゐる時に、高杉晋作から聞いたことであるが、

『自分の親父が云ふのに、武士と云ふものは困つたと云ふことを云ふものでない。困つたと云ふ時は即ち死ぬる時である。平生よく是は困つたものであると云ふ様なことをよく云ふが、それは極くいけない。決して困つたと云ふことを云ふものではない。又困ることが無い様に考へなくちやならぬ。困らん様に困らん様に考へて行かなくてはいけない』と云ふことを聞かされた。高杉はそのことによつて、死地に陥つたものに活路を與へたと云ふことであるが、以來私は『困つた』と云ふこと

を言はぬやうにしてゐる。人は、ともすると、『困つたな』とよくやるが、あれはいけない。どんな困つた場合でも『なに、困らぬぞ！』と云ふ氣組でやらぬといかん。何分困ると云ふと、智慧も分別も出なくなる。従つて解決のつく事柄でもつひに其の緒すら見失つてしまふものである。

『なに、困らぬ』と云ふつもりで、萬事困らん様に困らん様に心がけて行くと、窮すれば通ずで、又自づと別の道が開けて行くものである。

私は今年（昭和十一年）九十四歳殆んど一世に近くを此世で通す譯であるが、時折私の健康法について聞かれることがある。が、私は別段これと云つて健康法なるものを用ひたことがない。強ひて私の健康法を申すならば出されたものをよく噛んで嚥下すること、そ

新着一口噺

舊日なた

店員が支配人の室へ強情な債権者が來てゐて、どうしても歸らないと訴へた。支配人は、『君は僕が留守だと云つて斷



つたのだらうなり』と訊いた。店員は答へて『え、そ

れは云つたんですが、どうしても彼が來た時、丁度私が働いておつたものですからネ』

釣銭問答

乗合自動車に乗込んだ婦人が、車掌に十圓札を出して、

婦人『お氣の毒ですが、五錢白銅が一枚もないものですから』

車掌『いゝえ、御心配には及びません。』

れから今云つた『困らぬ主義』である。如何なる場合に處しても、

『なに、困らぬぞー』

此の氣組みである。これは大變よろしい。

此の世の中は、必ずしも安く楽しく暮してばかり行く譯には行かぬ。何日何時どんなことに遭遇するかも知れぬ。が萬事此の心がけで行くならば、艱難ものかは、人生程楽しいところはない。(維新夜話より)

徳富蘇峰氏

予の宗教觀

予は宗教を哲學にて説明し、若くは科學にて解釋せんとするのを見て、寧ろ御苦勞千萬のことゝ思つてゐる。宗教は謂はゞ人の心の底から現出せられたる美術である。それを科學的辯證法や、哲學的推理法を以て説明せんとするのは、全く見當違ひであらう。固より宗教の補助學としては、哲學も科學も無用ではあるまい。

併し宗教そのものゝ本體は、決してさるものではない。宗教は予の見る處では、論ずべきものでは無くして、信すべきものである。證すべきものでは無くして、感すべきものである。

宗教は人間心靈學上の最高美術である。宗教に必要なものは、想像と感情である。人間の熱烈なる感情と、高遠なる想像とが合致して此處に宗教なるものが出来る。それを理智一遍にて説明し去らんとするは全く見當違ひといはねばなるまい。

予は或る人々が偶像崇拜を排斥するのを、寧ろ不思議と思ふ。それは偶像と云はゞ、何物か偶像ならざらん。世の中の人々が偶像を排斥するといふのは、唯だ甲の偶像を尊崇して乙の偶像を排斥するに過ぎない。

凡そ人間の心の中には、何か必ず偶像があり、若くは偶像らしきものがある。天地神明を信ぜずといふ者にも、又所謂無神論者にて、己自身を偶像とし、時としては自己崇拜を事とする者もある。(蘇峰自傳より)



唯今百九十九枚差上げますから
早合點
『今日は素晴らしい誕生祝があるよ』

『へえ、誰の誕生日だね?』
『デイオンヌの五ツ子さ、あの五ツ子が今日から三つになるんだよ』
『や、それや大變だッ! ちやあとの二人は擧はれちまつたのか?』

學校で
『先生ッ! 僕、鉛筆も紙も忘れて來ちまつたのですが』

『それはいけませんね。若し戦場へ行くのに銃も彈薬も持たない兵隊があつたとしたらどうですかッ?』



『それは將校だと思ひます。』

雙仰運動ニユース

薩南吹上ヶ濱に

吉田絃二郎氏を迎へて

追悼法要を勤修

吉田絃二郎先生の事は屢々報じた所であるが、其後先生は益々奥様の菩提を願つて敬虔な生活を續けられてゐるが、この悲しみの中に靜かに沈潜して生死の一大事を深く考へられてゐる姿は尊くも亦神々しくもある。奥様の

冥福

の爲に各地に——伊豆修善寺、鹿兒島の吹

上演、信州輕井澤等——奥様の句

碑建立を發願せられたのも、この

尊い宗教的生活から生れたもの

であるが、此句碑建立を廻つて、

先生と本會の因縁は更に一段と

深まる事となつた。それは鹿兒島

支部の主任小橋麟瑞氏が吹上演の

句碑竣工の折に先生の來臨を迎へて、會員一同で奥様の追悼法要を舉行したいと發願せられた事である。早速先生に報告すると、先生はいたく感激せられてこの上もなく喜ばれてゐるが鹿兒島支

椎尾博士北支に飛び

犒軍と宣撫に活躍す

——本宗管長代理として——

支那事變の勃發するや我淨土宗では直ちに適切な方法により出征將士並に家族の慰問に盡

部員一同の床しい心情が美しくも輝いてゐるのではないか。既に讀者の知られてゐる如く先生の玉稿は毎月「淨土」誌上を飾つてゐるが、先生の毎號執筆はただ「淨土」のみである。而も「淨土」執筆は奥様の御冥福の爲とあつて原稿料は受取られない。先生の美しい殉情が「淨土」誌上に溢れ出てゐるのも偶然ではあるまい。かゝる關係にある本會であるから、本會の最大支部たる鹿兒島支部のこの發願も亦偶然でなく、佛縁の然らしむる所である。

力して來たが、更に先には中村博士を北支に派遣し、續いて昨冬は桑田百山法主を管長代理とし

て中支に送り、夫々懇ろに皇軍の勞を犒つた。然るにこれに満足せず今般皇軍の慰問と今後の狀勢に對する我宗として處する方策を確定せしめる爲に椎尾博士を再び管長代理として戰塵漸くをさまれる北支に派遣した。即ち博士は本月九日飛行機にて北京に飛び、各地の皇軍を慰問し、更に北支新政府の要路者にも面會し、祝辭を述べると共に、今後の北支民衆の宣撫工作に就て種々の意見を——例へば佛教大學の創立に依て宗教的に日支兩民族の融和をはかること——進言せられた。博士の今般の渡支は種々の點に於て重視せられてゐるが、北支の現狀を觀られて今後の民衆宣撫工作に對する適切な方策を考へつかれた事と思はれるから、博士の高邁な識見から如何なる妙案が現はれるか舉宗刮目してゐる所である。尙博士は議會再會迄には歸京せられる筈である。

會員の聲

非常時の初春を迎へ、聖壽の萬歳と皇軍の武運長久を祈り、「淨土」の發展向上を賀します。さて新年早く希望（理窟）を述べさせていただきます。

一、表紙は三卷六號の如きでない限り、色刷寫眞版の方がよくはありませんか、新年號は、支那戰線と、平和の鳩を現して居ると思ひますが、明治時代の三文雑誌の表紙見たいですね、繪ならば、一卷六號、二卷二號、二卷八號の如きが良いと思はれます、餘りに干渉しすぎますがね。

一、歌壇、俳壇は吾等が、會員獲得に用ふる最も良い武器ですから、どんな事情があつても、決して止めて下さいますな、そして、三等の次ぎ三人か五人かに佳作とでも書いてほしいもの、それから末尾の一句を割愛して、簡単に投稿規定を毎月書いてほしいものです。

一、一月號の特輯はむづかしいですね、それから大部見出しも人をひきつけるやうに工夫されて居るやうですが、見出しは人をひきつけるやうな、平凡な見出しにして下さい、吾々が會員獲得に先づ淨土を呈上しますが、その時、誰れも見出しだけをバラ／＼と見て呉れますが、その時、論説の如きは別として、他の文章の題が或ひは「榮華凋落光明」とか「彼佛今現在世成佛」とか「果心居士」とか書いてあると、中味が平凡に面白く書かれて居ても、私にはむづかしいですと一頁も讀んで呉れません、之はなにが書いてあるのかしらと思はす見出しが良いと思ひます。

一、黄色の頁の童話は毎月缺かきずにやつて下さい、今月の童話は實に、文章と云ひ、テーマと云ひ、満點です、前號までの童話は、如何にも作りましたと云ふ素人臭い所が多く、テーマも、文章もあまり感心出来なかつたが、今回ののは雙手を舉げて敬意と満足を表せます。

一、旅路の芭蕉の如き、連續趣味小説を掲載されたい。

一、良き上人傳でもあるなら少しづつ、ボツ／＼掲げて頂きたい。一度に出すと、上人傳の押し賣りになります。

一、以前にあつた家庭欄はもう廢止ですか、家庭欄はあつても良いと思はれる、そして教育學や、醫學や、家事や、戀愛や、夫婦和合等の立場から、家庭の爲になる事をのせられるのも良いと思ひます、例へば、「子供のしつけ方」とか、「遺傳」とか、「子供の職業のえらび方」とか、「夫の心得」とか、「結婚前の娘の心理」とか云ふ事を書いてもらふ事です、誰れにもわかるやうに、例へば二卷八號、一卷五號、創刊號、二卷九號の如くです、共產主義者は眞正面から、主義を宣傳しないでせう、一人の黨員を獲得するには、「女」「文學」「趣味」を以つて働きかけます、そして本人が氣がついた頃には共產主義の思想を抱いて居ます、淨土もさう云ふ方法をも取るべきでせう、吾々が淨土一ヶ年や二ヶ年分で眞の信仰に入れるものではありますまい、して見れば、誰れが讀んでも何處かピンと来る所があつたら、なるべく全紙を通じて肩のこらぬものによろしいでせう、吾々は淨土によつて信仰への素地さへ出来たら良いと思ひます、やたらに、押し賣りする事は禁物です、それには半數位俗文に近いものを特に、興味をひくものを入れて

おく方が良いと思ひます、讀んで行くと、第一段は興味をひく文章で、第二段は轉向の文章で、第三段は、佛教因縁を説くと云ふ同じ型ばかりの文章が全紙を通じて掲げられて居るといやになります、そして文章にしても、大家以外は規定の字數に當てやうとされるからか、常に比喩と文章とテーマに無理があり、自然でない様な氣が度々します。

一、淨土宗も、眞宗の文書宣傳や、解釋法を研究される必要がありますね、それから光明會や、眞理運動をもね。

一、とびらの法然上人法語抄は現代文になほして掲げられては如何ですか。

一、鑽仰運動ニユースは、「會の動き」は勿論、信者の聞きたがつて居る淨土宗の社會的活躍のめざましさを、どん／＼のせて下さい、又佛教界の大重要記事も、せて下さい、簡単に結構です。

一、貴會が原稿を御依頼なさる時、創刊より今日に到る「會員の聲」中良きものを選んで印刷して、それと一しよに御依頼狀を出されたならば、一月號特輯の如き文章も出来ないと思ひます。（滋賀縣 西堀和三郎）

法 語
解 説

光ひかりの世せ界かい

法 然 上 人 詠 歌

中 村 辨 康

さへられぬ光りもあるをおしなべて

へだてがほなるあさがすみかな

(法然上人作 春の歌)

てたらめの人生観じんせいくわん

マーカスオーレリアスは「人生」を「芝居」に譬へて居ます。

俳優が樂屋に居る時には只の人間に過ぎないが、舞臺に出ると、武士になつたりお姫様になつたり乞食になつたり殿様になつたりしますのと同じやうに、人間も此世に生れ出ると色々な者になつて、苦しんだり、悲しんだり、笑つたり、怒つたりして五十年七十年を過しては、やがて舞臺裏へ歸つて行くのだと云ふのです。

面白い見方ではあります。

かの十返舎一九は

「此世をばいざお暇にせん香の煙りと共にハイさようなら」と辭世を詠んだと傳へられて居ますが、一脈相通する氣持が眼はれます。

一九のは些さか浮世を茶化したところがあり「虛無主義」の感じが強いやうです。

然し兩方とも其根柢に「運命論」的なあきらめがある様で、本當の「大悟」でもなく本當の宗教でもないやうに思はれてなりません。

「處世」上には、一面「結局さうした氣持ちで暮らすのがよいのではないか」と思はれる節もありますけれども、それでは決して人生を完うした事にはならず、人生の尊さ人生の價值も知

らず、苦しいは苦しいなりに悲しいは悲しいなりにあたらず人生を終つてしまはねばなりません。

時々舞臺に出ては樂屋にすつこむ。成る程天地の悠久なるに比較して、人間一生の五十年七十年は束の間ですから、その五十年七十年をどんな生活で過ごさうが、約束付けられた役者の藝として一役やつただけであつて、舞臺裏へ歸ればお給金は同じなのだと思へれば、苦も亦た苦とするに足らず樂もまた羨むにはあたらないかも知れませんが、それでは人間全體が皆なお芝居をやつて居るのであり、本氣らしく見せては居ても、子供のまゝ事遊びと同様な偽裝生活と云はねばなりませんから、それでは全くつまらない人生です。

個人主義ではそれでよいのかも知れませんが、それにしても一種のごまかし人生観です。寧ろ「でたらめな人生観」です。誰が私達を躍らせて居るのでせうか。そしてまた私達は唯だ漫然とその何者かに躍らせられる事に甘んじて居なければならぬのでせうか。

そんな馬鹿氣たことがあるものではありません。

それでは私達の背後にかくれて居る惡戯好きな「脚本作者」の一人よがりには過ぎないのですもの。

人生の價值とは

明朗な元氣に満ちた人生！
理想實現に邁進する愉快な人生！

其處にのみ人生の價值があるではありませんか。

然し、然し、

その理想とは何でせう。

苦しい事のみの多い人生を明朗ならしめる理想とは何でせう。

金では無論ない。名譽でもない。

さればと云つて學問でもない。

金は申すまでもなく生活上缺く可からざるものではありませんが、理想なき人の持つ金は陰に陽に其人自身を毒し、且つ數多い他人に色々な迷惑を與へて居ます。然かも其人は少しも氣が付いて居ない。他人に迷惑をかけて居ることに氣が付いて居ないので。恐ろしい事です。金自身に惡魔的な特質があるからです。だから通常では「調御」が出来ないので。

名譽を望むこともまた同様です。

何しろ大變な魅力がありますから。

だが、考へて見れば名譽なんて云ふものが此の世の中に本當にあるのでせうか。假に何かの地位を得たとして、それが果して名譽なのでせうか。

其責任を考へたら、事實は苦しいばかりで、物質的にも精神

的にも人一倍の消耗があるだけです。唯だ夫れ／＼の地位に依つて、國家の爲め社會の爲め若しくは其所屬する團體の爲に奉仕することに人生の價值を見出し、其處に自分の生甲斐を感じなかつたら、到底やつて行けるものではありません。だから其人に取つて其地位は名譽でも何でもなく、結局負擔なのです。個人主義で考へるならば全くつまらない夢なのです。俗諺にある聞いて極樂見て地獄なのです。第三者から見たら名譽かも知れませんが、自分に取つては「苦」であり、「自ら求めた心配」であり「重荷」なのです。唯だ社會から何とか彼とか云はれる空虚な「名」にいやしい誇を感じてエラ相に構へて居るだけなのです。蒋介石にしたつて、スターリンにしたつて、獨裁の誇りを感じて、それが人生に於ける最大幸福であり最大名譽であると考へたことなのでせうが、事實は「苦勞」だけであり、やがて「没落」があるだけではありませんか。

一體「名譽」など云ふことその事が既に間違つて居る考へで、私達人間世界の辭書から、そんな文字は抹殺すべきものであり、そんな思想は消滅せしむべきものです。

其人の努力、其人の責任、たとへ多少の過ちはあつても一生懸命にやつて呉れた勞力に對して第三者から尊敬して上げる。

それだけでよいではないですか。若し第三者の尊敬に對して其人が自惚れたら、もうそれで其人はオチヤンです。おしまひで

す。もう其任務遂行にヒビが入つて來たのですから、其人から其任務を取り上げ可きです。

だから徒らに「名譽」など云ふものを考へたり望んだりするのは間違ひです。

其處には最初の目的たる「明朗なるべき人生」がないからです。

「學問」にしたつてさうです。

孜々として學問して行くのは無論尊いことです。またかゝる人がなければ文化は進展しません。人間社會になくはならぬ事です。然し「學問」の目的が若し其人の生活を幸福ならしめるのであるならば、それは飛んでもない大きな間違ひです。

學問の目的は自分を犠牲にしてその研究の爲には如何に苦勞しても、全體が幸福になるならばよいのであつて、其處に基礎が置かれて居なければならぬからです。しかもそれは専門的なもので、人生の各部門を同時に一人が究めて行けるものではありませんから、畢竟一部門に過ぎないのですし、更には凡人々に望むべきものでもなく、一部の特殊のもので一般に通ずるものではありません。

人生の價值はさうした形式ではなくして、凡ての形式の上に内容として盛り入れらるべきものです。

何んな職業を持たうとも、また何んな地位に居らうとも、貧

富貴賤智恵上下の區別なく、一切の人の上に見出さるべき「生甲斐」こそ、人間に取つても最も必要なものでありませう。

然らば其「生甲斐」を何處に認むべきでせうか。

それは人間としての本當の目的が確立しない限り駄目な事です。いくら理論を云つても本當には分らないからです。

然し端的に申しますと

「永遠の命の中に自分の命を投げ込んで唯だ一向に努力して行ける生活」

其處に本當の喜びが感じられるやうにならなければ、本當の

「生甲斐」も本當の幸福も判らないと思ひます。

もつと外の言葉で云ふなら

「無我精進の生活」

かシミジミと味はれて行くところに、本當の「生甲斐」があ

り、本當の「生き行く目的」があり、本當の「幸福」があり、

本當の「明朗さ」があるのであるまいか。

申し上げるまでもなく凡ての現象はお互に關係し合ひお互に

影響し合つて且つ現はれ且つ推移して行くもので、一つとして

獨立したものはありません。

だから「我」を立てるところは何もない譯です。

お互ひの大進展の爲に努力して行く。何處に「我」を立てるところがあるでせう。

例へば皇軍の將士が「我」を忘れて「大御機威」の爲に皇運の御隆昌の爲に戦場に働いて行くのと同じ心境でいい譯です。

自分の「一小生命」を皇國の「大生命」の中に捧げて「天皇陛下萬歳」を叫び乍ら喜んで死んで行けるところ、其處に本當の「生甲斐」を感じ本當の日本人たる幸福を感じて居るではありませんまいか。

一旦緩急ある場合、そして私達日本人である限り、誰でも之が易々と實行されて行くのです。

然し平時でもそれが容易く實踐されて行かねばならないと思ひます。

理窟でなくしかも何も教へられずして、我が皇軍の將士は實踐して居るのですが、それこそ本當の生活なのです。だから平時に於てもその生活が喜んでなされるでなければ、本當の人生の目的を確立して居るとは云へません。

之は一旦緩急ある戦時のみ必要ではなくして、平穩な日常生活に於ても常に素直に行はれなくては、本當の進展、随つて本當の幸福もあり得ないと思ひます。

然るに私達の實際生活は何うですか。

かうした適確な實踐實例が示されても、それは戦争だから兵隊だからと特別扱いにして自分の生活指導とは考へても見ない

のです。そして其大目的には知らぬ顔をして目前の小目的たる小利小欲に耽溺して居るのです。

私達は例外なく皆な「永遠に死なない自分の發展」を熱望して居ます。然し小さな自分の中に大きい死なない自分を求めても見出されないのは當り前なのです。

こんな見易い道理があるのに皆なそれを求めて居ります。

だからこそ幸福にもなれないのです。

然し佛教で云ふ「緣起の理」を本當に感じて行くなれば、實にハッキリと鮮かに「無我」が體驗され、そして眞實な清らかな幸福が訪れて呉れるのであるけれども、理窟では分つても實際生活では中々さう簡單に行かないから結局「論語讀みの論語知らず」になつてしまひます。

それが即ち

さへられぬ光りもあるをおしなべて

へだてがほなるあさがすみかな

なのです。

永遠に朗らかなるべき明るい幸福の世界もあるのに、「自我」のためにくらまされてハッキリそれを認識させて呉れないのは全く恨めしい事です。

理窟では判つてもそれが本當の人生の目的に契ふ生活だとは受取られないのです。

人生としての本當の生甲斐が判らないのは理窟が判らないからではないのです。感情が許さないのです。欲情が許さないのです。

宇宙の大哲理である「緣起の理」を深く究めれば、謂ゆる「轉迷開悟」し得るでせう。

また精神を統一して深い禪定に入り、天地と一體になつたら大に悟るところもあるでせう。

然し誰にでも出来ることではありません。

理論としては高遠でも實踐方法としては極めて容易でなくては萬人共済のものではありません。

茲に哲學以上のものとして宗教があるのであり、道徳以上のものとして信仰があるのだと思ひます。

宗教の使命

宗教は宗教の爲の物であつてはならぬと思ひます。

然るに大概は宗教の爲の宗教になつて居るやうです。宗派の爲の宗派になつて居るやうです。

それでは嘘です。

宗教は人間の目的を發見し且つそれを貫徹させるものでなくてはなりません。

人間生活の上に求める最高のものを宗教に依つて見出すべき

ものです。

人間の中に伏在する最高最純な價值を生活の上に實現させるものでなくてはなりません。

つまり宗教の目的は直ちに人生の目的であるべきです。

然らば宗教の實踐は何りするのかと云ふに、先づ「永遠の命」の中に、自分の小さな「命」を投げ込むことから初めるのが、一番いい方法だと思ひます。そしてそれはまた誰にでも出来ることです。

即ち皇軍の將士が「大機威」と云ふ「大生命」の中に自分を没却するのと同様に、「阿彌陀」と云ふ「無量壽」の中に「我」を歸投し「南無」するのです。

秘達が此意味で「南無阿彌陀佛」することは、單なる口の先だけの形式ではありません。心も身體もその「南無阿彌陀佛」の聲を通して天地の「大生命」の中に投げ込むことなのです。

ノホホンに構へるのではなく、天地の大生命たる根元の「如來」に、心からまかせ切ることが出来たら、それでもう立派なものです。

其處にはおのづから「無我」も體認されるでせう。宇宙の大原理たる「縁起の理」も自然に判つて来るでせう。本當の曇りのない朗らかな「人生」も明らかになつて来るでせう。永遠に「死なない自分」も悟つて来るでせう。汲めども盡きぬ「幸

福」も發見出来るでせう。

其處にのみ「さへられぬ光」があるのです。

しかも其「光」は常に要求されねばならぬものです。

然しともすれば「霞」のかゝつて来る秘達の人生です。

「大生命」への思慕が忘れて、目前の小利小欲にのみ馴染みたがる秘達です。

だから法然上人も

さへられぬ光りもあるをおしなべて

へだてがほなるあさがすみかな

と歡聲を洩らされつゝ、しかも愈々益々念佛唱名にいそしまれたのでせう。

然し「さへられぬ光り」の世界は常に發見され常に望まれて居られたのでした。

「永遠に盡させぬ命」を見出した明るい朗らかな人生を體驗して居られたのでした。

人生の生甲斐を感じつゝ、身も命もすてゝ人々の胸の中に信仰の芽を萌え出さしめることに専心して居られた御一生だったのです。

「たとひ身は死刑に處せらるゝとも此事云はずばあるべからず」

と、朗らかなるべき人生へのよき教への開顯に努力せられたの

でした。

そして「是れひとへに朝恩なり」として、老軀を以て邊土遠郷の四國の果てまでへも喜んで行かれたのでした。

この非常時ばかりでなく、常時に於ても「捨身」的な「無我精進」の出来る生活こそ、本當の「生甲斐」が感じられ、本當の「幸福」が感じられるのです。

通常ならば悲しき運命も喜びの中にジツとかみしめて見れば、明朗な長閑けさが見出されます。

それは唯だ信仰ある人へのみ初めて味はれる心境です。

それは獨り法然上人の獨占した心境ではなくして、誰でも獲得し得らるゝ人生です。

でたらめな人生観ではなくして、全體と共に喜び、全體と共に進展して行ける實踐です。

何もむつかしい事ではありません。我が皇軍の將士が何の顧慮もなく體現しつゝある心境です。

唯だ表現された言葉が違つて居る丈で、其宗教的心境としては全く同一のもの。

「小我」に執着するところ、其處には何の幸福もありません。そして本當の人生の生甲斐も感じられません。

「身を捨てゝ浮ぶ」武術の奥儀も其處にあるではありませんか。「道」は一つです。

「小生命」に生きずして「大生命」に生きる處に本當の人生があるのです。本當の「さへられぬ光の世界」があるのです。「へだて顔する朝霞」たる「小生命」の殻から抜け出たら何でもない事です。

非凡な大凡人

法然上人は全く自分の大きさを知らなかつた人であつた。

「烏帽子を着ざる十惡の法然房、愚痴の法然房」

「我はこれ無知の身なり。破戒の身なり」

「烏帽子も着ざる法然房なり。黑白も知らざる童子の如く、是非も知らざる無智の者なり」などゝ云つて居られ、常に如来の前に拙劣な自分を反省しつゝ、

「唯だ仰いで念佛往生を信ず」と謙虚な氣持でおられたのである。

「源空は智徳を以て人を化するは有り」

阿彌陀佛は、愚痴のものなれども念佛の大先達として、あまねく化導すること廣し。我若し人身を受けば大愚痴の身となり念佛勤行の人たらん。」

と云ふ御言葉の如き其處に一點の僞慢もなく僞瞞もなく不眞實もないのである。實に譬へやうのない非凡な大凡人ではないか。

編輯後記

○戦勝の春もいつしか二月、もうそこいらの梅も咲き出すのではないかと、編輯子は久し振りに暖い風氣に恵まれた日外の小春日を頼もしく眺めてゐます。一月中に二月、三月、四月と先のことはばかり心配してゐるわれわれには春夏秋冬ごつちやませのやうなもの、ほつかりと訪れて来たこの暖氣に美しい春の郊外への強い憧れがやはりうずいて来ます。

○上下一致して長期戦の決意を固めた今日、いたづらに春をうたつてはゐられぬが、平和のための戦争である。冬来りなば春遠からじ、やはり春は讀へたいのである。

○「浄土」を皇軍將士の慰問用として多部隊を戦線に贈つたことは屢々誌上で傳へましたが、將士の方々から感激にみちた丁寧な禮狀や御批評などを頂き、編輯部もまた感激にみたされてをります。今後ともかう云ふ方面に一層の活躍を期してをります。

○吉田絃二郎先生は諸方の雜誌よりの執筆を断られてまでも本誌のために御寄稿下されてをります。近く亡き奥様の句碑を會遊の地鹿兒島吹上濱に建てられることになり、本會の鹿兒島支部では、竣工の日を期して法要を行ふことになりました。先生も非常に喜ばれて、これに御出席下さるとのことです。

○正月號は、幸ひ非常な好評を得まして、増刷はいたしたのですが、發行後間もなく品切となり後からの御注文はやむなくお断り申しました。今後とも一層の御支援をお願いします。

○眞野正順先生の御病狀も最近是非常に順調で、われ／＼の喜びに耐へないところであります。

すが、未だ本誌に御執筆下さるまでには行かず、先生の一日も早く御全快遊ばされ、誌上に、また本部の諸事業に、再び颯爽たる御活躍の日の來たらんことを心から祈つてをる次第であります。

○今号は「佛教常識」は都合上載せませんでした。が、來月はその欄を擔當せられることになりました。また、「家庭欄」も復活することとし、それぞれ準備を進めてをります。なほ、種々計畫を進めてをります。どんなものが出るか御期待を願ひます。

○本部長一同今年こそはと腕によりをかけて張り切つてをります。オール自星の優勝力士の如く、オールヒットのリーディングヒッターの如く、本年の計畫を貫徹する覺悟であります。(大木)

浄土 二月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和十一年一月三日印刷納本
昭和十三年二月一日發行

(定價十錢)

正順

印刷人 赤尾 光雄

東京市牛込區市谷加賀町一ノ二
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人遺仰會

東京市芝區芝公園四丁目會館内
振替 東京 八二一八七番

「浄土」購讀規定

一部 定價 金十錢
(送料一錢)

一ヶ年 金一圓
(送料不要)

右の一ヶ年金壹圓は法然上人遺仰會の會費です。入會御申込みと同時に一圓御收めになれば、「浄土」が一ヶ年間購讀できます。その他種々な特典が得られます。

絶好の

布教用書

法語例

(一七) わが浄土をたつる心は凡夫の報土にむ(生)まるゝことをしめさんがためなり。

(二〇九) 酒飲むは罪にて候か。答。まことには飲むべくもなければども。この世のならひ。

(二一五) 子産みて神佛へまいる事百日はばかりと申候はまことにて候か。

答それも佛法にはいま(忌)す。

(二二四) 出家は若きと老いたるといづれが功德にて候。老いては功德ばかりえ候。若

きはなをめでたく候。

法然

上人

法

語

抄

私たち
の今なやん
でゐる問題を法
然上人は己に八百年
の昔に悩んでおられた。
そして迷信的、偶像的宗教の
是正改革を叫んだのが祖師であ
つた。

西にルーテル東に法然と稱せらるゝ所以
である。法然上人の句々言々悉く時代への關
心が波うつてゐる。

本書整備内容 (藤井實應編)

○道を求む ○新しき救ひの道 ○本尊 ○安心 ○念佛
○生活 ○社會 ○和歌 ○法然上人の略傳

發行所

法然上人讃仰會

定価 三十三錢

送料共 クロース装
菊半截一三〇頁

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可 (毎月一回一日發行)
昭和十三年一月廿日印刷本 昭和十三年二月一日發行

浄土 第四卷 第二號

定價金十錢 (送料一錢)